
COBALT-SERIES
前田珠子
古戀唄
いにしえごいうた
5
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄(いにしえこいうた) 5

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）5

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　古(いにしえ)綣唄(こうた)5

天を支える者　古綣唄5 …… 7

紫水晶綺譚 …… 151

あとがき …… 185



ガジエス
ファラスース侯
爵家の三男坊。

クランクレイア
「女神の娘」と呼ばれる
ディエーン王国の王女。

登場人物紹介


フィオーン王子
クランクレイアの兄で
ディエーン王国の
王位継承者。
ギスカリール
ハーリクとも高貴な人々
とも親しい謎の青年。
ハーリク
ガジェスの親友。
実家は土産物屋。

イラスト／明咲トウル

天を支える者

古戀唄（いにしえこいうた）5

37

ウァランセイド・セディシャの葬儀は、霧雨の降りしきるなか、しめやかに執り行われた。

列席者は多くはない。

その才を栄達のためでなく、自らの知的好奇心のために費やした彼は、世間では変人と見なされており、また、彼が生涯最期の時、何者であったのかを、神殿が明らかにすることを望まなかったからである。

彼は、人生の最期の時、このディエーンを支える次代の柱神を見極めるべき役目を負った人物だった。

選定者――柱神の半身となる神宝の声を聞き、私心なく、最も相応しき相手を見極

める役目を負うた者。
彼だけが、この国の未来を支える者を見極めることを創世七神より許されていた人物であるはずだった。
しかし……。
神宝を次なる柱神に選ばれた人物に委ねることなく、彼は世を去ってしまった。
セディシャが怠惰だったのではない。
彼は、俗世の利権に捕らわれた者たちの放った凶刃に倒れたのだ……恐らくは。
そして、それゆえに、彼は選定者としての誉れを得ることなく、質素な弔いで送られることとなったのだ。
本人は、別段気にしないかもしれない。
あらゆる意味で、彼は栄誉、名声といったものに、一片の興味も示したことはなかったのだから。
だから……気にしているのは、彼ではない、その周囲の者たちだった。
「いたわしい……本来なら、国中の民に感謝をもって見送られるべき人物であったと

いうのに」

葬儀を執り行った神官のひとりが小さくつぶやいた。

過去において、選定者の葬儀を、最高司祭でない者が行ったことはない。

国の守護者となる新たな柱神を見極めるということは、それだけ大切な役目であり、だからこそそれを全うした者は、絶対の尊崇の念を、周囲から捧げられるのだ。

だが、ウァランセイド・セディシャの場合は……。

「詮方なきことだ……」

同期に誓言を立てた神官が低く、返した。

「彼は選定者だった……しかし、次代さまをはっきりと見極める前に命を落としたのだ……このような不吉な事態が、民に知れたらどうなると思うのだ。しかも……」

ウァランセイド・セディシャの死後明らかになった、あまりにも恐ろしすぎる事実に、その声は微かに震えていた。

「わかってる……」

と、故人の葬儀を執り行った神官はうなずいた。

見極める前に命を落とした選定者――それだけでもあってはならない事態だというのに、今回はそれに輪をかけて厄介な問題が生じていた。
失われてしまったのは、ウァランセイド・セディシャだけではなかった。
そして、そちらの喪失こそが、神殿にとっては重大事だった。
けれど、そのことを口にすることは許されない。
「……せめて、彼が天上において、相応しき祝福を受けんことを祈ろう……」
同輩は「そうだな」とうなずいた。
彼の瞳もまた、不安に翳っていた。

「えー、と。必要なものは……」
鏡を通して話したガスカールから教えて貰った『邪気除け』物品を、アマンシールは、やはり教えてもらった場所に配置するのに余念がなかった。

「聖水……杯一杯ずつ。聖塩……は、天然塩に聖水ひとしずくたらしたもので代用できるとして、それも聖水と一緒に部屋の四隅において、と……」

「……なあ」

そんな彼に声をかけてきたのは、アマンシールを庇って毒の塗られた刃にかかり、一時瀕死の状況に陥った、赤毛の親友だった。

「聖水って、神殿の専売特許だろ？　お前の二番目の兄貴さんが、神殿にコネあるのは知ってるから、手に入れられたことは不思議じゃねえけど、なんて言ってねだったんだ？」

聞かれるだろうなー、とは思っていたので、アマンシールは素直に答えた。

「邪気除けに聖水欲しいって」

「それで聖水用意してくれるって……普通、あり得ないだろ!?」

噛みついたハーリクに、アマンシールはへらっ、と笑って答えた。

「や、まあ……次代候補に挙げられたマルシアス家の子息が原因不明の死を遂げたりしちゃって……ハーリクのおかげでわたしは助かったけど、狙われたことは事実で

……聖水や聖塩って、邪気は勿論、殺意や悪意からも守ってくれるらしくて……で、欲しいなーと言ったら、あっさりくれたというか……」

「……それで、二番目の兄貴さん、それをお前がどういう用途で使うつもりなのか知ってるのか？」

親友の問いに、アマンシールは目を逸らすことで答えた。

「……知らないんだな？」

念を押され、アマンシールはもごもごと言い訳する。

「や、だってさすがに、神殿に伝の多い兄上のことだから、大丈夫だなんて言っても納得してくれないだろうし……ギスカリールさんのお墨付き貰ったからと言っても、専門知識でも口でも兄上には勝てないし……」

なんのかんのと言い負かされるのは目に見えていたから、説明を省いたのだと彼は言った。

この言葉に、ハーリクはふう、と大きく息を吐いた。

「お前、時々妙に要領いいよな。つか、ギスカリールさんの影響か？　今度から嘘も

方便の化身と呼んでやろう」

呆れはしても、不快感を覚えた様子ではない赤毛の青年の言葉に、アマンシールは「そんな、口先魔神みたいな渾名は遠慮する」と返した。

（まあ、ギスカリールさんの場合は、しっかり時と場合を見極めて使い分けてるみたいだから、問題なさそうだけど……）

「それで言うなら、ハーリクの方が口はうまいじゃないか。しっかり、今日からわたしの部屋で寝泊まりすること、みんなに納得させたわけだし」

そう、アマンシールが幽体離脱をして、体を留守にしている間、肉体の見張り役を請け負ったハーリクは、彼のために用意された部屋が「広くて豪華で落ち着かない」ことを理由に、アマンシールの部屋に移るためにちょっとした言を弄した——当人同士の間では打ち合わせ済み——のだ。

未知に等しい毒物のせいで、一進一退の容態だったころはともかく、体調も安定して来た最近では、夜中に目が覚めることも多く、そうした際、広い部屋にひとりきりでいることに、なんとも言えない違和感を覚えるのだと訴えたところ、ファラスース

家の当主は、あっさりとアマンシールの部屋に移ればいいと言い出したのだ。
まさに狙い通り――アマンシールは口のうまさと話運びにおいては、生涯友人にはかなわないだろうと思ったものだ。
しかし、それはなにもハーリクの独力ではなかったらしい。
「それなら、おれの手柄じゃないな。……ほんとに、ギスカリールさんて世情と人間に通じすぎっつーか。あのひとの言うとおりにしたら、あっさり思惑通りに運ぶんだものな。ま、伊達に長生きしてないってことだろ。見習わないと、だなー」
いろんなことでお世話になりまくっている、出会って以来五年以上が経つのに、外見が全然変わっていない万年美青年は、どうやら本当に色々な知識と経験を抱えており、しかもそれを他者に伝授するのに惜しみがないらしい。
おかげで助けられている身としては、ありがたいことこの上ないが……ほんの少しだけ、あまり親友があの年上の友人の影響を受けないといいな、とアマンシールは思った。
人間、知識と学習と経験は必要だと重々承知してはいるが、愛すべき友人があの、

ある意味正体不明のぬらりひょんとそっくりになるのは、どうにも見たくないと思ってしまうのだ。

（頼りがいはあるし、実際頼りっぱなしだって自覚はあるけど……あのつるんつるんしたつかみ所のなさだけはなー）

本人が耳にすれば「失礼な」と言うに違いないことを思いながら、アマンシールはせっせと塩の山を作り始めた。

万が一にも、留守の肉体に、別の魂やら邪気やらが入り込んだりしないための結界作りは、彼にとっては命綱だったので、真面目に真剣に作った。

集中すると、周囲のことに気づかなくなるのはアマンシールの癖というもので——だから、彼は寝台の上で、ぱらぱらと書物をめくりはじめた親友の目が、ちっともそこに集中していないことに気づけなかった。

部屋の四隅に聖塩の山と聖水を満たした杯――。

心を落ち着ける効果のある香を焚き、ほんの少しだけ窓を開いた状況で、寝台に横になったアマンシールは、ほどなく入ってきた風霊に手を引かれ、魂だけの存在として屋敷を抜け出した。

ロスタロイドの街の灯りを眼下に、風そのものの早さで移動するのは二度目だったけれど、最初のときは自覚もなくやったことだったので、なにやらとても新鮮な体験だった。

（まるで地上に星が散らばったみたいだ……）

などと暢気なことを考えている内に、風霊たちは彼を王宮の奥庭に連れて行ってくれた。

クランクレイアの寝起きする棟どころか、柱神コーランジュの影響の強い場所に運ばれ、アマンシールは正直困惑した。

（ええっと……クランさまに会いたいって、伝えたつもりだったんだけど……口に出しても頼んだけど、まだ不慣れなせいで、意志の疎通がうまくできなかったのか

な……？　あ、でも昼間でさえ迷うのに、こんな星明かりしかない状況じゃ、クランさまの部屋に近づくことさえ至難の業だぞ……どうしよう!?）

生来の方向音痴を克服できないまま今に至る彼は、目的地にたどり着ける自信皆無の状況に、思わずその場に座りこんでしまった。

と、そのときのことだ。

ふわり、と白い影のようなものが視界を過った。

（風霊……？）

思わずそちらを振り返ったアマンシールの目に映ったのは、半ば透けて見える、どこかで見たことのあるような気がする、だが実際の記憶にはない女性だった。

風霊とは違う、だが明らかに実体ではないその姿に、アマンシールは暢気にこんなことを考えた。

（幽霊って、初めて見たな）

空気を震わせることのない声が、彼の耳に飛び込んできたのは、次の瞬間のことだった。

『失礼な。まだ隠り世への川を渡ってはおりませんよ』

その声に、アマンシールは心底驚かされた。

耳に馴染みのある、知っているひとのそれだったからだ。

『まさか、コーランジュさまですか!?』

誰かに似ていると思ったのも道理――そして、同時にすぐに相手を認識できなかったのも。

……当代柱神であるコーランジュは、二十代半ばにしか見えない姿に若返っていたのだ。

（意識だけだと、外見年齢思いのままってことなのかな？　だとしたら、知らないひとが見たら、絶対誰かわからないよな……）

やはり、どこかずれたことを考えていた彼を、ここ半年以上、クランクレイアとさえ会っていないはずの女性は、屋敷へと誘った。

『風霊たちに、あなたをここに連れて来てくれるよう、頼んだのはわたしです。あなたのやり方が間違っていたわけではありませんから、心配しないで。時が来る前に、

どうしても一度、あなたとは話しておきたかったものだから……』

なんの『時』であるのか、コーランジュは口にせず、アマンシールも尋ねなかった。

ただ、わかっていたはずのことを、当人の口から聞かされたことで、胸がざわめいた——目の前の女性が、遠からず時を終えてしまうという事実ゆえに。

『……正直安堵しました。もしかして、わたしの方向音痴が風霊たちの感覚を狂わせたのではないかと思ったものですから』

その場合、いくら幽体離脱に成功しても、目的地にたどり着けない可能性が出てくるわけで……はっきり言って、意味がない。

そんな彼の言葉に、コーランジュはくすくすと笑った。

『それは悪いことをしましたね。ですが、こんな方法でもとらなければ、あなたと会うことも出来なかったものだから……体のほうは、もう言葉を紡ぐことも難しいものだから。本当に、あなたが風霊とふれあえるようになってくれてよかったわ。ギスカリールに伝言するだけでは、行き届かないところも出たでしょうしね』

その声に、嘆きや悲しみの響きはなかった。
生涯の終幕を前に、彼女は死への恐怖を感じてはいないようだった。
『伝言って、もしかして……』
ギスカリールがことあるごとに口にしていた内容を思い出し、アマンシールはまさか、と目を瞠った。
『ええ、そう。駆け落ちを勧めるよう言ったのはわたしです。選定者と次代候補が外部に洩れた時点で、厄介なことになるのは目に見えていましたからね。まったく、あれほど情報の流出には気をつけていたというのに……』
嘆かわしげに、コーランジュが息をついた。
『最も良い方法は、セディシャから掠め取ってでも、『貴神の午睡』を手に入れた上で姿を消すことだったのですが、こうなっては仕方ありません。なるべく早く、クランを説得して姿をくらますことです。ここしばらくは神殿も忙しいでしょうから、ねらい目ですよ』
掠め取るだの姿をくらますだの、なにやら不穏な言葉が羅列されていくのを、アマ

ンシールは目を丸くして聞いていた。

それに、よくわからないのが、彼女の言うところの『こうなっては仕方ない』の意味だ。

（候補のひとりが命を落としたこと、かな？　もしかして、そのことでまた新たに候補が立てられることになったとか……？）

それなら自分が最有力候補に挙げられた事実が覆されることもあり得るのだろうか。

（だとしたら万々歳だけど……でも、それなら駆け落ちする必要はなくなるんじゃ……？）

などなどと考えていたアマンシールに、コーランジュは訝しげな眼差しを投げた後、はっとしたようにつぶやいた。

『まさか……あなたはまだ知らされていないのですか？』

なにをですか――と、問い返す必要さえなかった。

彼の表情から答えを読み取ったらしい女性は、沈痛な面持ちとなり、恐ろしい事実

を口にした。

『選定者ウァランセイド・セディシャは、三日前に命を落としました。それと同時に、神宝（しんぽう）である『貴神の午睡（ごすい）』が消えたのです。神殿は、新たな選定者と神宝を見いだすのに血眼（ちまなこ）になっているのですよ』

と。

思いがけない事実を聞かされ、アマンシールは大きく息を呑んだ。

38

その日、クランクレイアは珍しくライラーナに起こされてもなかなか寝台から抜け出せなかった。

体調が悪いわけではない——単なる寝不足である。

先日、夜更けにふらふら意識だけで会いに来た恋人とのやりとりがあって以来、彼女は安眠という幸福を、半ば失っていた。

昨夜もそうだった。

アマンシールには、幽体離脱の危険性を説き、二度とやるなと釘を刺しはしたものの、また無意識に彷徨い出たりしないだろうかと、夜更けすぎまで心配で、窓から庭を見下ろしていた。

どうやら心配なさそうだと思い、寝台に潜りこんだら、今度は彼が口にした言葉を思い出してしまい、あれこれ考えているうちに目が冴えてしまい、寝付けなくなってしまったのだ。

（まったく……ジェスはいったいなにを考えているんだ……）

恋人による、唐突な駆け落ちのお誘いは、後になってじわじわと頭に染みこんできて、彼女を現在悩ませているのだ。

正式な披露目こそまだだが、すでに婚約状態にあるふたりが駆け落ちしなければならない理由などない——そう、確かに先日まではそうだった。

けれど、アマンシールが次代柱神の候補に選ばれ——そして恐らくは次代になるだろうことが明らかになったことで、事態は複雑に変化した。

彼が、神の眷族に加えられることの意味は大きい。

ひととは違う時の流れを生きることになる彼とは、まず正式な婚姻を結ぶことができない。彼は神籍を得ると同時に、人間としての籍をなくすのだから。

だが、それは大した問題ではない。神の伴侶は神の眷族と見なされるのだから。

問題なのは、両者の時が同じではないことだ。柱神となった父を持つとはいえ、クランクレイアはひとに過ぎず、その寿命もまた人間の持つものでしかないということだ。

柱神は、個人差はあるが、二世紀から三世紀の時を生きる。

（ジェスが次代さまに選ばれたら、わたしは確実に彼より先に老いて死んでしまう……）

自分だけが老いていくのも、置き去りにしてしまうとわかっていることも、彼女を随分悩ませた……もっとも、自分でない誰かが彼の隣に立つことを考えたら、まだ許せる範疇だと覚悟は決めたわけだけれど。

だからこそ——わからないのだ。

なぜ、彼が駆け落ちなどと言い出したのかが。

（選ばれてしまったら、辞退はできないと、当代さまが仰ってらしたから、まさかそれで……？）

選ばれる前に、逃げてしまおうと思ったのだろうか。

いや、それはないだろうとクランクレイアは思った。
たとえ逃げたところで、柱神の半身である神宝がある限り、必ず見つけ出されるに違いないのだから。
第一、そんなことが世間に知れたら、国を揺るがす大醜聞だ。
正直なところあまり政治に関心のないアマンシールだが、祖国に泥を塗るような真似をするとは思えない。彼は家族のことも、王太子であるフィオーンのことも大切に思っていることを、クランクレイアは知っている。
だが、だとしたら……。
（なぜ、あんなことを……？　気まぐれや悪ふざけであんなことを口にするやつじゃない。きっと、わたしの知らないなにかがあるんだ……）
そうとしか思えないが、その『なにか』の正体が皆目見当もつかないのだからお手上げだ。
「しまった。こんなことなら、追い返す前に事情を聞き出しておくんだった」
と、後悔したが、後の祭りだ。

「せめて手紙で説明ぐらいしてくれたらいいのに……」

庭のテーブルにほおづえをついて、そうつぶやいたときのことだった。

「なにを手紙で説明して欲しいんだって？」

はっとして顔をあげると、大好きな兄が微笑みながら歩み寄ってくるところだった。

「兄上」

ぱっと顔を輝かせ、クランクレイアはフィオーンを迎えた。

アマンシールほどではなかったが、この兄と顔を合わせるのも久しぶりだったので、喜びは大きかった。

「お仕事のほうはよろしいのですか？」

王太子として、政務に携わるようになって以来、彼の訪いはほとんど午後の、それもあまり早くない時刻に集中するようになっていた。

まだ午前中に、顔を見られるとは、本当に珍しいことだった。

「ああ、愛しい妹と、久しぶりに昼食を一緒にとりたくて、数日頑張ったんだよ。



……まあ、午後になったらまた新しい書類が届くんだろうけどね」

二十歳となり、男らしい精悍さを備えるようになったフィオーンは、蕩けるような笑顔でそう答えた。

いまだ婚約者のいない彼は、宮廷の女性に絶大な人気を誇っていることを、ナルレイシアはよく知っていたが、確かにこんな笑顔を向けられたら、好きにならずにはいられないだろうなあ、と思った。

「本当ですか？　兄上と昼食をご一緒できるなんて……」

紫水晶の瞳をきらきらさせてそう言ったクランクレイアの黒髪に、近づいてきたフィオーンの大きな手が、ぽん、と置かれた。

「気持ちがいい風なのはわかるが、午前中に帽子もなく、外に出るのはやめなさい。日焼けはともかく、そばかすができたりしたら大変だろう？　もっともクランなら、そばかすが散ってても愛らしさを増すだけだろうけどね」

甘々である。

溺愛する妹に対しては、讃辞の言葉を惜しまない青年に、クランクレイアはつい笑

い出してしまった。

気恥ずかしさを覚えないわけではないが、こうした兄の言葉がくすぐったく嬉しく感じられる——恋人が、あまりそうした方面を得手としていないだけに、尚更かもしれない。

「殿下、あまりそういうことは仰らないでくださいまし。クランさまが、ますます遠出なさるようになっては困ります」

冷やした香草茶の入ったグラスの乗った盆を手に、近づいてきた侍女のライラーナが、苦笑混じりにそう言った。

「言われて見れば……花壇の花の種類が、ずいぶん豊富になったね。緑の指が健在なのは喜ばしいが、まさかひとりで出掛けたりはしていないだろうね？」

やんわりと釘を刺すような念押しに、クランクレイアは一瞬言葉に詰まった——実は何度かに一度は、途中で敢えておつきの侍女とはぐれているのだ。

「えー……その……気をつけます」

思わず視線が泳いでしまったが、優しい兄は、それ以上追及したりはしなかった。

「そうしておくれ。いくらきみが精霊たちに愛されているといっても、毒を持つ虫や蛇がいないわけではないのだから。ジェスが一緒に回ってくれていたころには、こんな心配はいらなかったのだけれど……まあ、彼も大変そうだしね」

最後の部分に、クランクレイアはぴくりと反応した。

フィオーンは――アマンシールが柱神候補に選ばれたことを知らないはずだった。ギスカリールからは、他言無用だと念を押され、だからもちろん、彼女は兄にそのことを告げてはいなかった。

(まさか、兄上、ご存じなんじゃ……)

思ったけれど、口に出すのは憚られた――なにがどうとは説明できないけれど、得体の知れない不安を覚えるのだ。

「ジェスがた、大変って……なにかあったんですか？」

努めて冷静な声で尋ねたつもりだったけれど、少しだけ、声がかすれた。

そんな彼女の様子をなんと思ったのか、フィオーンは瞳を翳らせた。

「しまったな、ジェスの気遣いを無にしてしまった……きみにそんな顔をさせないた

めに、きっと知らせなかったのだろうに」
どくん、と動悸が激しくなった。
（兄上は知ってらっしゃるの……？　それとも、わたしの知らない全然別のことがある？）
「あ、兄上……ジェスに、ジェスになにかあったのですか!?」
落ち着いた素振りなど、もうできなかった。
「見当違いな逆恨みをした同期生に襲われたという話だ。大丈夫、ジェスは無傷だ。怪我ひとつ負ってないよ。ただ、彼を庇った友人が、ひどい怪我をしたらしい」
頭ががんがんした。
（逆恨み？　襲われた……？　それで庇った友人がひどい怪我って……!?）
それははたして、単純な事件と見なしていいことなのだろうか？
アマンシールにまつわる謎が、また増えてしまった。
まるで迷宮に迷い込んでしまったかのような錯覚に見舞われ、クランクレイアは思わずかぶりをふった。

「大丈夫かい？」

と、気遣うフィオーンの声も、耳には入っていなかった。

ウァランセイド・セディシャ殺害の犯人の捜索は、一向に進展の兆しを見せなかった。

選定者が役目を終える前に、それも凶刃によって命を落とすなどという、前例のない事態に、神殿には動揺が走ったが、しかしそれは、直後に判明した事実の前では微震に過ぎなかった。

神殿関係者全員の顔色を失わせる重大事は、厳重に隠された棚のなかに置かれた、組木細工の小箱の姿をしていた。

精緻なからくり仕掛けのその小箱は、選定者であるセディシャと、黄神神殿最高司祭であるグラスパード以外には開けられないよう、精霊の守護が掛けられていた。

しかし、新たな選定者を見いだすまでの間、神殿において保管するために持ち帰られたその小箱を手にしたとき、グラスパードは血の気を失った。

精霊の守護が破られた様子もないというのに、小箱のなかからは神宝である『貴神の午睡』が消えうせていたのだ。

事態のあまりの大きさに、関係者は皆一様に言葉を失った。

セディシャが生前、身の危険を察知し、別の場所に隠したのではないのか。いや、殺害した犯人が奪って逃げたのではないのか。

さまざまな意見が出されたものの、真実が奈辺にあるのかわかる者などいるはずもなく、自然、セディシャ殺害の犯人を一刻も早く捕らえるしかないという結論に達した。

どちらにしても、犯人を捜し出さねばならないことに変わりはなかったからだ――それも、早急に。神々の力はあまりに大きく、神の意に反した輩のみに、その怒りが向けられるとは限らないからだ。

もしもその怒りが、事態を防げなかったディエーンという国そのものに向けられた

ら、この国は最後だ。神々の祝福を受けた国から、神々の怒りを買った国へと転落する――。

二度と、この国を守る柱神が出現することはなくなるだろう。

いや、すでにその可能性はあるのだ……気づいた少数の者たちが、口にすることはなかったが。

神宝は、まさか、永遠に消失してしまったのではないのか……。

当代コーランジュを最後に、ディエーンは柱神を失うのではないのか。

誰よりも、その不安と恐怖に苛まれたのが、グラスパードだった。

彼は、コーランジュの容態がいかに深刻であるかを知っている。すでに彼女は寝台に自力で起きあがることさえできなくなっており、風霊の助力なしには、他者に言葉を伝えることもできないのだ。

他者と対面するだけで、すでに命を削る状態に陥っている。

そうとわかっていても、彼はコーランジュを訪れぬわけにはいかなかった。

ディエーンの守護者の余命を奪う非道な行為を、けれど彼は選ばなければならなか

った。

そんな彼の身勝手を責めるように、コーランジュの屋敷を守る風霊たちは冷ややかな態度を崩さない。衰弱していく一方の、屋敷の女主を、風霊たちがいかに愛しているか、幼いころからよく知っているだけに、グラスパードは彼らに対して怒りを抱くことはなかった。

覚えるのは自己嫌悪だ。

間違いなく、近いうちにこの世を去る老婦人の最期の時間を、安らかならざるものに変えようとしている自分自身が情けなくも厭わしい。

だが、それでも彼はディエーンのために、彼女から答えを引き出さなければならなかった。

「神宝『貴神の午睡』が眠りについていた二世紀もの間、その眠りを守っていらしたコーランジュさまなら……いえ、コーランジュさまにしかわからないことと存じます。かの神宝はいまいずこにありましょうや……よもや、まさかとは思いますが……」

それ以上、言葉を進めることは、グラスパードにもできなかった。

言霊の力に対する配慮ももちろんあったが、それよりも彼が恐れたのは、自らの声がそのことを紡いだ結果、耳で聞いてしまうことだった。

コーランジュが、寝台に横たわったまま、乾いた唇を微かに震わせた。

彼女の意を汲んだ風霊たちが、仕方なさそうに音を声に紡ぎ直す。

『心配には及びません、最悪の事態ではありませんからね。『貴神の午睡』は砕けてはおりません……けれど、ごめんなさい、グラス。どこにあるのかまでは、いまのわたしでは……もう……』

「いえ、いいえ！」

グラスパードは老いた両目を涙で潤ませながらかぶりをふった。

額を地面にこすりつけてでも、詫びなければならないのは自分のほうだというのに、逆にコーランジュに謝らせてしまったことが辛かった。

（この穏やかでやさしいひとを、最後まで苦しめることしかできないとは……）

なんとも言い難い無力感に苛まれながら、それでも彼はそれ以上崩れることを自ら

に許さなかった。
ここで自分が泣いて、いったいなにになるというのか。
頬を伝わせることなく涙を止め、彼は深々と頭(こうべ)を垂れた。
「ありがとうございました。そのお言葉だけで充分でございます」
彼の思いが伝わったのか、コーランジュは皺深(しわぶか)い口元に笑みを刻んだ。
こんなにも美しい笑顔を見たことはない、とグラスパードは思った。

39

アマンシールが幽体離脱して、クランクレイアに会いに行ったはずが、結局コーランジュから衝撃の事実を聞かされた三日後の午後、ロスタロイドのファラスース侯爵邸に珍客が訪れた。

淡い金髪に整った顔立ちの青年は、屋敷に勤め始めてまだ二三年の若い女性陣からは熱い視線を送られる一方、勤務五乃至十年の中堅家人たちには不気味なものを見るような目を向けられ、それ以上の古参家人からは淡々とした態度を取られるという、少々奇妙な反応をされる人物だった。

言うまでもなく、ここ十年以上、外見が全く変わっていない万年青年ギスカリールである。

王女クランクレイアからの見舞いの名代として、堂々と王家の紋付きの馬車でファラスース邸を訪れた彼は、まずは当主であるリュシアンドに挨拶の口上を述べ、見舞いの品を渡し、その後でアマンシールの私室を訪れたのだ。

次代柱神の後継者選定の最中、他国のとはいえ柱神の縁者である自分が、特定の誰かと親しくするのはよろしくないからと、手鏡ごしの対面ばかりですませてきたのだが、クランクレイアの名代という肩書きがあれば、直接訪れても問題なしだと判断したらしい。

「まあ、つっても表向きは元話し相手へのお使い、だからなー。そーそー頻繁に使える手じゃねえし。ただ、今回ばかりは、きっちり情報見せ合わなきゃまずそうだってことで」

軽い口調でそこまで言い、ギスカリールは一転、真剣な眼差しをアマンシールに向けてきた。

「小春の君、なんて言った？」

一瞬なんのことかと思ったが、すぐにそれがコーランジュを指すものだと理解した

アマンシールは――小春とは実は冬の暖かい日のことで、異国では『老婦人の夏』とも呼ばれているのだ――素直に答えた。

「ウァランセイド卿が亡くなって、彼が預かっていたはずの神宝が行方不明で、神殿は大わらわだって」

「その通り」

びしっとアマンシールに指をつきつけると、ギスカリールはこちらの困惑などお構いなしに、こう続けてくれた。

「つまり、駆け落ちするなら、いまが好機だってことだ」

「ちょっと待ってください！」

と、横やりを入れてきたのは、いまだ一日の半分を、寝台の上で過ごすことを医師に命じられているハーリクだった。

「候補者のひとりと選定者が亡くなったって話は聞きました。でもって次代の柱神を本当に選ぶ神宝が行方不明だってことも。でも、それってもしかして、ウァランセイド卿による選定は白紙に戻ったってことじゃないんですか!?　新たな選定者は、全く

別の候補をあげるんじゃありませんか？　亡くなったセディシャさまには申し訳ないけど、もしかしたら彼の見極めは間違ってて、それで神々の守護が行き渡らなかった……とか。だとしたら、アマンシールとクランクレイア姫の間に、障害があるとは必ずしも言い切れないんじゃありませんか……？」

しかしハーリクの主張は、ギスカリールに鼻で笑われ、一蹴された。

「誤解があるようだから、はっきり言っておくが、選ぶのは選定者じゃない。選定者という呼び名が誤解を招くのだろうが、次代の柱神を選ぶのは、その半身たる神宝だけだ。選定者とは、人間のように喧しく主張することのない神宝の選定を、正しく見極める役目を負う者であって、あくまで神宝の補佐役に過ぎない。つまり、何人選定者が代わろうと、神宝に選ばれたのが誰であるのかは不変だということだ」

つまり、アマンシールが次代の柱神に選ばれることは不可避なのだと――。

冷酷ですらある宣告に、それでもハーリクは食らいついた。

「でも！　その神宝が姿消しちゃったわけじゃないですか!?　本当にアマンシールが選ばれてたって証拠にはならないじゃないですか！」

それは、ハーリク自身のためではない、アマンシールのための楽観的な気休め。

ハーリク自身は、アマンシールが人間から神に変わろうが、これまでと同じ距離感でつきあっていく覚悟をつけていたのだ……とうに。

けれど、人間の身から神の眷族に生まれ直してしまうアマンシールの負担を思って——今度の事件が、あるいはすべてを白紙化してくれるかもしれないという可能性を見いだして。

不可避なら仕方ない——どこまでもつきあおう。

だが、もしもそれが避けられる道が残されているならば。

自分の安寧のためではなく、大切に思う友人の未来のために。

いかなる努力も惜しまない——その思いが伝わってきて、当事者を脇に置いて、熱く言い争うふたりの友人の姿に、じいん、と胸が熱くなるのを感じた。

(なんていいやつなんだろう……)

しかし、自分の置かれている立場を、友情ゆえにちょっとだけ忘れたアマンシールに、ふたりの身内はすかさず鉄拳を下した。

「なに、ひとりでほのぼのしてやがんだ!?」
「まったくだ。なにより、クラン嬢を口説き落とす台詞のひとつぐらいは当然用意してるんだろうな!?」
ほんの先ほどまで、喧々囂々の口論をしていたくせに、あっという間にギスカリールとハーリクは同盟を結んだ。
（や、なんか、違うだろ、違うだろ、違うだろ!?）
救いを求めるも、誰も手をさしのべてはくれなかった。
かけがえのない友人は、しかし状況次第で『ちっとも優しくない友人』に早変わりするのだと、その日アマンシールは初めて知った。

「だからっ！　四の五の言わずに一緒になって、連れ戻される前に子供の二人や三人作っておけって言ってるんだよ！」

ギスカリールのあまりの直接話法に、アマンシールはあんぐりと口をあけてしまった。

「あ、あの……？」

「柱神になっちまった後だと、さすがに出生率は落ちるらしいけどな。なる前なら、普通の人間の男女とそう変わらんって話だ。ひとりぐらいだと、王家のほうに先に見つけられた場合、抹殺される危険性がないとは言えないが、ふたり三人、クラン嬢によく似た子供がころころしてるの見てみろ、あの父馬鹿と兄馬鹿なら、絶対ほだされてなし崩しにお前らのこと認めるに違いないって」

それはある意味的確な指摘だったかもしれないが、アマンシールにはどうしても認められないものだった。

「なに言ってるんですか!?　クランさまは……クランさまは、まだ十四歳なんですよ!?」

肉体に負担をかける行為が、その健康を著しく阻害することは知られている。

その最たるものが、肉体の準備が出来ていないうちの妊娠だ。

肉体の準備が十全に整っていないうちに妊娠した場合、母体にも子供にも大きな危険がつきまとう。

「絶対、絶対、絶対、駄目です！」

強硬に主張するアマンシールに、匙を投げたのか、ギスカリールが舌打ちしながらうなずいた。

「……仕方ない。それが一番手っ取り早かったんだが……確かにクラン嬢の健康を無視してやっても意味ないからな」

そう打ち出し、彼は「だが、これは絶対だ」と条件づけて、最低三年は発見されず、しっかりきっぱり夫婦になって、最低ひとりは子供を作っておくこと、と言い切った。

「だから、それって違うでしょう!?　第一わたしはまだ、クランさまから、駆け落ちしてもらえるかどうかの返事も貰ってないんですよ……」

これに対するふたりの友人の返答は「ならさっさと口説き落とせ！」だった。

日ごとに、焦燥感は増す一方だ。
国のためだと、民のためだと、何度自分に言い聞かせようと、そのために自分が選んだ行為の卑劣さに心が軋る。
だが、後戻りできないことも、また事実。
死なせないために——より多くを生かすために。
禍の種は、芽吹く前に潰さなければならない。
……そう、それがどれほど愛しい存在であろうとも。
国の大事の前に、ただひとつの命を惜しんではいられないのだ——この国を守るためには。
「あと、ひとり……」
消すべき命の数を数える。
「最後の、ひとり」

それで、この国は救われるのだ……。

40

「聞こうか。なぜ、駆け落ちなのだ？」

初夏の夜――王宮の一室でのこと。

開いた窓から飛び込んできた白い影に、部屋の主である少女は、単刀直入に問いただした。

長い黒髪に、極上の紫水晶の瞳――月の明かりを受けて、きらきらと輝くその宝石を、飛び込んで来た実体のない青年は、嬉しそうに、眩しそうに見つめている。

「ジェス！」

答えようとしない恋人の名を、クランクレイアは苛立ちも露わな声で呼びかけた。

（手紙では伝えられぬ重大事だと聞いたから、この訪問を受けたというのに、なんで

ジェスはいつもいつも、緊張感がないのだ!?）

意識だけによる行動が、いかに危険な行為であるのか、自分はもちろん、ギスカリールからも聞いて知っているはずだというのに、目の前の恋人は、相変わらずのほほんとしていて――と、彼女には見えた――心配のあまり腹が立ってくる。

「ジェス！　聞いておるのか!?」

厳しい声をかけると、ようやく気づいたように、青年――アマンシールが目を瞬かせた。

『ああ、すみません。本当にクランさまだなぁと思ったら、嬉しくて……』

この間はてっきり夢だと思ってましたし――とつづける彼の口調は、どこまでも平和で、危機感のかけらも感じられない。

（こやつは……どうして……っっ！）

怒鳴りつけたいところを、クランクレイアはぐっと我慢した。

彼と話すとき、かっとなるのは禁物であることを、さすがに彼女も学習していた。

なにしろ、自分は感情的になると相手の返事を聞かずにぽんぽん言葉を投げかけた

挙げ句、なんだかもうどうにでもなれという気分になって、怒鳴りつけてお終いにしてしまう癖があるようだからだ。過去、何度もそれで、アマンシールと衝突して――周囲から見ると、それはほぼ十中八九、彼の受難でしかなかったのだが――きたのだ。

いくらギスカリールが安全な方法を教えたとはいえ、素人に過ぎないアマンシールが、何度も体を留守にするのは危険が大きすぎる。何度も繰り返させないためにも、今夜しっかり話し合う必要がある。

すう、と息を大きく吸い込んで、吐いて、吸い込んで、吐いて。

気持ちを少し落ち着かせてから、クランクレイアは口を開いた。

「……わたしもだ」

言ってしまってから、それが本当に本心だと気づいた。

好きだから、会えるだけで嬉しい。でも好きだから、いろいろ心配させられて、苦しくもなって、憎らしくさえ思えてしまう。

ひとの心は、まったく簡単にはいかない。

「わたしも……ジェスに会えたのは……会えて、嬉しい」
顔が熱くなるのを感じながら、小さな声でそう告げると、アマンシールは嬉しそうに微笑んだ。
彼の笑顔がやさしいことは、いやというほど見て、知っているはずなのに、久しぶりに目にしたせいか、顔がますます熱くなる。
（ああ、でもここで黙りこんでいては話が進まない）
これ以上、恥ずかしいことを言われたり、言ったりしなくてすむように、クランクレイアはきゅっ、と唇を引き締めた。
「それはそうと、ジェス！　そなたはわたしの質問に答えていないぞ！　どうして駆け落ちなんて言い出したんだ!?　気まぐれだとか好奇心だとか、白々しいことを言ったら」
殴るぞ、と言いかけ、相手がいま実体でないことを思い出す。
「……ギスカリール殿に頼んで、殴りに行ってもらうぞ。そんな馬鹿馬鹿しい理由で、お前があんなことを口にするはずがないことは、よーくわかってるんだから

な！」

白状しろ、と上目遣いで睨みつけるが、アマンシールの顔から笑みは消えない。

まるで、愛しくてならないとでも言いたげなその顔を見ていると、せっかくの決意が揺らいでしまいそうで、正直クランクレイアは困った。

「ジェス！　へらへら笑ってないで！　なんとか答えたらどうなんだ!?」

ライラーナに頼んで、今夜は警護の兵を、部屋から少し遠い場所に配置してもらったのだが、こんなに声を荒げては意味がない。

（駄目だ、落ち着け、落ち着くんだ、わたし！）

懸命に自分に言い聞かせ、クランクレイアはもう一度深呼吸した。

その時を見計らったかのように、アマンシールが口を開いた。

『マルシアス家のファリネスが、亡くなりました』

唐突な言葉に、クランクレイアは思わず首をかしげた。

（マルシアス家の……？　ああ、南部の大貴族の……ファリネスとは確か、神学院に進んだ第二子だったか……？）

だが、そのファリネスがなんだというのだろう。

彼女の疑問を読み取ったのだろう、アマンシールは笑みを消した顔で、淡々と、告げた。

『彼は……彼も、次代の候補のひとりでした』

あまりにも思いがけない言葉に、クランクレイアは息を呑み、次の瞬間叫んでいた。

「馬鹿な！　どうしてマルシアス家の者が……あそこには始祖さま直系の血は……いや、そうじゃない、なんで、そんなことをジェスが知ってるんだ!?　次代候補は選定者と神殿の中枢の数人しか知らないはずなのに！」

正確には、その数人しか知っていてはならないはず、だ。

守秘義務を破った者には、重い罰が科せられる決まりだ。

いくら同じ候補だからといって……いや、同じ候補だからこそ、アマンシールが知っていてはならないことだった。

『人の口に戸はたてられないということでしょう……我が家の場合は、神殿に伝のある兄がいるおかげで、わたしは彼ひとりしか知りませんが、父たちはほかにも数人、

知っているようです。恐らく、他の候補の家族や親戚たちも、似たような状況かと思います』

「……なんてこと……」

あまりのことに、すぐには言葉が出て来なかった。

ディエーンにおける柱神の交代がもたらす、血なまぐさいもうひとつの交代劇のことは、クランクレイアも知っていた。当代柱神であるコーランジュが、そのことに心を痛めていたことも、だからこそ二度と同じことを繰り返させないよう手を尽くしていたことも、だ。

だのに、当事者に近しい者たちが、そこまでの情報を入手できるとなれば、彼らの努力はほとんど意味をなさないではないか。

「なんのために、当代さまたちが……それなのに……」

呻いた彼女は、そのとき不意に、アマンシールの唐突な言葉を思い出した。

（マルシアス家の次代候補のファリネスが死んだ……？　ジェスは、でも、どうして死んだのかは言わなかった……！）

まさか、という思いが湧き上がる。
それと同時に、これまで見知ったさまざまなことが脳裏に甦った。
突然、王立学院の寮からロスタロイドの自宅に戻ったアマンシール。しばらく王宮に来ることができないと、ほとんど説明なしで綴られた手紙。そして兄フィオーンから聞かされたアマンシールの『大変な状況』……。
（逆恨みした同期の学生に襲われて……庇った友人が怪我を……）
「まさか、ファリネスは殺されたのか!?　ジェスも……」
否定されることを期待して口にした言葉は、恋人の表情で肯定されてしまった。
「ジェスも……襲われたんだな」
『わたしを襲った相手が持っていた短剣には、一般では入手困難な毒が塗られていたそうです』
アマンシールの答えに、クランクレイアは両手で顔を覆った。
「ああっ！」
心臓が、きりきりと締め付けられる――この先、この恐怖の鎖が外れることは決し

てないだろう。

「……庇って怪我をした友人というのは……？」

大丈夫だったのか、と尋ねた彼女に、アマンシールはこくりとうなずいた。

『ギスカリールさんが手配してくださった解毒剤のおかげで……いまではもう、かなり元気で、今夜もわたしの空になった体を見張ってくれてます』

名前は出なかったけれど、それが彼の親友であることは間違いなかった。

ハーリクに、クランクレイアは心から感謝した。アマンシールを身を挺して庇ってくれたこともちろんだが、その存在が、どんなにか彼を支えてくれているのか、はっきりと感じ取れたからだ。

「……会って、お礼が言いたいな」

溢れそうになる涙を、寸前で止めて、彼女は一所懸命、笑みを浮かべた。

すぐにうなずいてくれるかと思いきや、アマンシールはなにやら複雑そうな顔で彼女を見つめていた。

（なにを……）

と思う間もなくピン、と来た。
「空を飛んで会いにいくんじゃないかと思ってるな？」
軽く睨み付けてやると、アマンシールはよそに視線を泳がせた――図星だ。
『え、いや、別にそんなことは……』
しどろもどろになって言い訳するあたりがわざとらしい。
本気で笑いたくなって、クランクレイアは告げた。
「当たり前じゃないか。空でも飛ばなければ、王宮から抜け出すことなんてできっこないんだから」
『クランさまっ!?』
慌てる恋人の鼻先に、彼女は指を突きつけ、宣言した。
「今度は、ジェスには止める権利はないぞ？　だって、誘ったのはジェスのほうなんだからな。考えてもみるがいい。空でも飛んで逃げなければ、あっという間にふたりとも父上と兄上の手の者に捕まってしまうに決まってるじゃないか。以前ならともかく、いまならジェスも風霊に助けてもらえそうだし、危険なことはないはずだぞ？」

にっこり笑ってそう指摘してやると、アマンシールはなにを言われたのか理解できない様子で、『え、あの？』と繰り返した。

クランクレイアは背伸びして、いまは実体ではない恋人の目を覗きこんだ。

「駆け落ち、するのだろう？」

アマンシールが、大きく目を瞠った。

『……して、下さるんですか？』

本気で驚いている様子に、少しだけむっとした。

「わたしも、気まぐれや冗談で、こんなことは言わないぞ？」

わたしも——その言葉の意味に気づいたのだろう、アマンシールは心から嬉しそうな顔になって何度もうなずいた。

『ありがとうございます』

礼を言う恋人の目を見つめたまま、クランクレイアは目を細めてささやいた。

「わたしひとりお婆さんになって、ジェスは若いままなのは狡いとか、そうなったらジェスはほかの可愛い子に目移りするんじゃないかとか、色々考えて悩んだりもした

けど……」

『そんなことはしません！』

大声で否定する恋人の、温度のない唇に、そっと指で触れて、クランクレイアは「うん」とうなずいた。

「うん。わかってる。全部、わたしが想像しただけのことだ。いろんなことを想像して、腹をたてたり喜んだり悩んだり……おかげで睡眠不足になって、ライラーナに怒られたり心配かけたりしたけど……」

でも、と彼女はつづけた。

「たったひとつだけ、想像できないことがあって……。ジェスが死んでいなくなることだけは、どうしても想像できないし、想像したくもない。だから……」

精一杯背伸びして、それでも少し距離が足りなかったから、クランクレイアは「少し屈んで」と告げる。

意味がわからぬながらも、言うとおりにしてくれた恋人の唇に、彼女は自分のそれを重ねて……そうして耳元にささやいた。

「一緒に行く」

と――。

執務室の扉をノックされた時、ディエーン王太子フィオーンは、いつものこととして返事しなかった。

答えようが答えまいが、父である国王から振り分けられた仕事の書類はこの部屋に持ち込まれ、受け取り拒否は許されない。

なにごとも経験だという父の言葉には同意するが、最近では増える一方で減る気配のない書類の山を見る度に、もしかして父は自身の負担を減らすことも兼ねて、こちらに仕事を回しているのではないかと思わずにはいられない。

が、この日、この時のノックの主は、いつもと違い、仕事を運んできたわけではなかった。

「ご機嫌いかがです？」

にこにこと――こちらの不機嫌な顔を無視して――声をかけてきたのは、彼のひとつ違いの弟だった。

第二王子ケルティス――同じ母を持つ兄弟ではあるが、普段あまり顔を合わせることのないこの弟に、フィオーンは常にある種の温度差を感じている。

「この書類の山の半分を、お前が引き受けてくれるのなら、少しは機嫌もよくなると思うんだがな」

淡々とした口調で返した兄の皮肉に、気づいたのかどうか……ケルティスは笑いながら手をひらひらと振った。

「ご冗談を。信望厚い兄上の代わりなんて、わたしに務まるわけがないでしょう。未来の国王陛下の仕事を手伝うだなんて、そんな畏れ多いこと」

おどけた態度でそう答える弟に、フィオーンは冷ややかな視線を向けた。

「……つまり、未来の王弟殿下は、兄を支えて国を治めるつもりはないと？」

「いやだなあ、揚げ足を取らないでくださいよ。もちろん、わたしの力の及ぶ限り兄

上をお支えしますとも。ですがいまのお仕事は、父上が兄上に任されたものでしょう？　わたしでは手が出ないと言っているだけです」

「手は、最初に出さなければ、最後まで出ないものだと思うが？」

気楽そうな弟の態度に、微かな苛立ちを覚えたせいか、口調はさらにきつくなった。

しかし、この弟は、兄の皮肉に挑発されたりはしなかった。

「兄上、ずいぶんかりかりしてるんですね。いけませんよ、甘いものでもいかがです？　ちょうど、母上のところから、焼き菓子を土産に貰ってきたところなんです。一息入れられてはいかがです？」

ケルティスの言葉に、フィオーンはぴくり、と肩を震わせた。

「……今度は、なにを持ってきた」

「ですから、乾燥果実の入った焼き菓子を……」

「それだけのはずはないだろう」

決めつけると、ケルティスは悪びれることなく、後ろ手に隠していた掌大の包み

を取りだした。

「兄上が、ちっとも母上に顔を見せてさしあげないから、わたしが伝書鳩よろしくお使いを頼まれるんですよ。お忙しいのはわかりますが、たまにはあちらにも足を運んであげてください……まあ、行きたくないお気持ちは、わからないでもありませんが」

そう言いながら執務机に近づいてきたケルティスは、処理途中の書類の上に、ばらばらと菓子ではないほうの土産を散らかした。

「……ケルティス」

咎める目を向けたが、妙なところで図太い青年は、にこにこ笑うばかりだった。

「今回の、母上のお薦めは、こちらのお嬢さんだそうです。ガッシュマサラ有数の名家のお嬢さんで、しかも性格は慎ましやかだそうで。兄上と結婚したら、きっと夫にも義母にも逆らわない従順な妻になるんでしょうね」

指し示された細密画には、なるほど線の細い、おとなしげな美女が描かれていた。

「持って帰れ」

にべもない言葉に、ケルティスが大仰に肩をすくめた。
「またですかぁ？　母上に愚痴られるのはわたしなんですよ。実際に話を進めるかどうかは横に置いておいて、少しぐらい興味を示して見せたら、母上だって満足なさるでしょうに……」
「母上ご自身が、このディエーンのことを考えて用意された話なら、伺うぐらいのことはするさ」
が、そうでない話に耳を傾けるつもりはない。
それきり、邪魔な荷物を机の端に押しやって、フィオーンは仕事を再開した。
仕方なさそうに、部屋を出て行こうとする弟に、彼は低い声で告げた。
「ケルティス。ここはディエーンで、お前はディエーンの第二王子だ」
ガッシュマサラではないぞ――言外の言葉に気づかぬはずのないケルティスは、しかしなんの反応も見せなかった。
当たり前ではありませんか――とさえ、口にしない弟の背中が、扉の向こうに消えたとき、フィオーンは固く目を閉じた。

41

一通の報せに、ファラスース家の当主とその三人の息子たちは、夜分にも拘わらず一室に集まり、いささか生臭い家族会議を開いていた。

「マルシアス家の息がかかっていたのですか？」

なにもかも初耳だった末息子は、父と兄たちから知らされた事実に、素直に驚いていた。

「……捕まった男は、そう自白したそうだ。お前と顔なじみであることを買われて、話を持ちかけられたのだと」

話とは、先日のノーシャンによる暗殺未遂事件のことだ。

とはいえ、あの事件において、ノーシャンは駒として利用されたにすぎない。彼は

知り合いの卒業生から唆され、痺れ薬だと言われて、小瓶を手渡されたのだ。

その、知り合いの卒業生が、よりにもよって、ファラスースの本拠地であるグランジェイドで発見され、配下によって拘束されたというのが、届けられた書状に記されていた内容である。

「相当金に困っていたのか、マルシアスからの申し出に飛びついたものの、自分は卒業した身で、依頼人が期待するほど簡単にお前に近づけないということで、例の御曹司に目をつけたらしい。確かに、卒業しても書庫を共有している関係で、学内で頻繁に卒業した神官を見かける神学院と同じに考えられたのでは、その男も困っただろうな」

とは、神学院を優秀な成績で卒業したくせに、周囲の期待を振り切って神官への道を選ばなかった次男坊だった。

「その男自身、自分の手は汚したくなかったのだろう。ファラスース家の者に手を下したとなれば、よほどの背後でも持たない限り、逃げ切れるものではないからな」

長兄の言葉に、まだまだ世間に疎い三男坊は首を傾げた。

「だって、依頼してきたのはマルシアス家なんでしょう？　あの家なら、匿うことぐらいできるんじゃありませんか？」

アマンシールのお人好し全開の台詞に、その父親と兄ふたりは同時にため息を洩らした。

「匿うことはできるかもしれないが、始末して口を封じる方が、もっと簡単だ」

「男もうすうすそのことに気づいたから、失敗したとわかった途端、ロスタロイドから姿を消したんだろう」

「そもそも、男がマルシアス家の差し金だと気づいたのも、依頼人と一緒にいるところを偶然見かけた別の知り合いから、それがマルシアス家の家人だと聞いたからだという話だ。もっとも、その知り合いとやらの言葉が正しいかどうかもわからないが」

ファバルワース、チェルギース、リュシアンドの順に続けられた言葉に、アマンシールはなんとも言い難い顔になった。

「それはつまり、その男はマルシアス家に依頼されたと思いこんでるだけなのかもしれないってことですか？」

「そういうこともあり得るという話だ」

こともなげにうなずく父の態度に、アマンシールはますます困惑顔になった。

しかし、海千山千の強者三人は、彼の態度をあきれたように見つめるばかりだ。

「本当に、マルシアスが関わっている可能性も、もちろん否定はできない。うちが、あそこの息子が次代候補だと知ることができたんだ。向こうにだってできるだろう」

次兄より生真面目だと思っている長兄の、思い切った台詞に、アマンシールは頭痛を覚えた。

クランクレイアを守るため、相当努力して政治を勉強したつもりだが、彼らを前にすると自分の不向きさ加減ばかりが見えてしまう。

「おまけに、あちらはうちと違って、次代さまに選ばれたくて仕方なかっただろうしねえ。まあ、うちみたく選ばれたくもなければ、ならせたくもないって家の方が珍しいんだろうけど」

ファバルワースの毒気まじりの言葉に、年長者ふたりが揃って眉をひそめた。

「こんなのが、神座についたらわたしたちの苦労は増える一方だぞ。それがわかって

いるのに喜べるはずがなかろう」

父親の意見に、大いに同感だとばかりにうなずいたのはチェルギースだった。

「父上の仰る通りだ。ただでさえ、妃殿下のお国の問題を抱えている状況で、ますます微妙な立場に追いやられる事態を喜べるものか」

ガッシュマサラの脅威を指しているのだと、アマンシールにもわかった。

まったくもってその通りだ……その通りだとは思うのだ、が。

（父上も兄上も、それはちょっとひどくないかぁ？）

少しばかり落ち込まずにはいられなかった。

「……それで、苦労量産機のわたしは、なんのためにここに呼ばれたわけですか？」

「いい歳して拗ねるな。小さな子供ならともかく、そこまで育ってちゃ、可愛くもなんともないぞ」

ますます酷いことを言って、アマンシールの髪をぐしゃぐしゃにしたのはファバルワースである。

「まあ、そうは言っても一応真相は調べないといけないわけだ。わたしたちとして

も、再発は避けたいところだからな。ところが、捕まった男ときたら、それ以上のことは口にしないんだと。多分、口を割ったが最後、今度はこっちに殺されると思ってるんだろう。全部白状したら密かに国外に逃がしてやると言っても、頑として首を縦に振らないそうだ。あまり手ひどい真似をして、苦し紛れにあることないこと吐かれても、調べが面倒になるばかり——ということで、だ」

にこにこと、裏のありそうな笑顔で、次兄はぽん、とアマンシールの肩を叩いた。

「お前の出番だ。母上に顔見せがてら、ダランジェイドに行って、その男から件の知り合いのことを聞き出して来い。父上が、全権委任状用意して下さるから、いざとなったらそれを見せて取り引きしても構わないから」

とんでもないことを言われ、アマンシールは「ええっ!?」と声を上げた。

「わ、わたしが、ですか!? だって、そういうことなら、兄上たちのほうが得意じゃないですかっ!?」

「そもそも、その男がお前に悪意を抱いたのだって、お前が融通のきかない不器用者で、父上に就職の口利きを兼ねて紹介してくれるよう頼みこんだのを、『父は多忙で

すので、お約束はできかねます』と突っぱねたのが理由だそうだ。そういうお前なら、口約束を反故にすることもないだろうと、お前になら話すって指名してきたそうだぞ」

駆け引き、取り引きの分野が、不得手だという自覚のあるアマンシールは、まさにそれが選ばれた理由だと聞かされ、がっくりと肩を落とした。

（なんだか、ちっとも嬉しくない……）

そうは思ったが、彼もあんな事件は二度と御免だったので、結局「はい」とうなずいた。

驚かされたのは、次の瞬間「じゃあ、明日の朝一で出立してくれ」と言われたことだ。

「あ、明日ですか!?」

「急がないと、問題の知り合いとやらが、どこに高飛びするかも知れないだろ？　多分もうロスタロイドにはいないだろうが、何とか国内にいるうちに身柄を押さえたいんだ」

ファバルワースのもっともな説明に、アマンシールはやはり「はい」としか答えられなかった。

（明日の朝一じゃあ、クランさまに事情を説明してる時間がないな。もう、今夜は遅いし……ギスカリールさんに事情を説明してくれるよう、頼んでおかないと）

そんなことをあれこれ考えている自分を、ほかの三人が、意味ありげに見つめていることに、そのとき彼は気づかなかった――。

アマンシールが出て行った後、年長者三人は、いよいよ本題に入った。

「これでよし……なんですが、ああも素直に従われると、少々不憫ですね。昔に比べれば、世間にも通じてはきたものの、家族に騙されるなんて、想像もつかないやつだから」

苦笑混じりにそう洩らしたファバルワースを、じろりと冷ややかに見つめたのはチ

エルギースだった。

「最初に言い出したやつがなにを言う。神宝が見つかっていない今こそが好機だと言ったのはどこのどいつだ」

「それはそうだけど……あのふたり、もう、ずいぶんと会えてないじゃないか。一度ぐらい、会わせてやってから送り出しても良かったかな、と」

自分でも珍しいことだとは思いつつ、ファバルワースは感傷的な言葉を口にした。

――もちろん、ほかのふたりのどちらかが、きっぱりと否定してくれることを確信した上でのことだったが。

「妙な気遣いは不審を招くだけだ。この時期、屋敷から出すだけでも、充分すぎるぐらい危険な賭けなんだぞ」

チェルギースの声は、しかし言葉の内容ほどに冷ややかでも淡々としてもいなかった。

このファラスース家の長男に生まれついたが故に、生来の情の深さを、意志の力で以て抑えつける術を身につけざるを得なかった兄のほうこそが、そう思っているに違

いない。

くすり、とそんな兄弟のやりとりに父であるリュシアンドが小さく笑った。

「騙してでも傷つけてでも、守ってやれる手が残っている以上、年長者としてはやるしかないだろう……たとえ、後で盛大に恨まれることになるとわかっていようとな。まあ、マルシアス家では違う選択をするかもしれないが……」

南の大家マルシアス家は、一族内の争いが激しいことでも有名だった。

ディエーンに加わってすでに三世紀近く経ったここ数十年、反王家として名高い一族のなかにも、穏健派と呼ばれる存在が大きくなりかけており、皮肉にもそのことが、一族内の対立を生み出したのだ。

その結果、かの一族の有力者は、かなりの確率で短命に終わる。

いや、そこまでとは行かずとも、派閥争いに明け暮れる名門は少なくはない。

リュシアンドの指導力で、一枚岩を保っているファラスース一門の方が、実は少数派と言えるのだ。

だが、だからこその危険も存在する。

権力の中枢に近い場所に生きる者は、どれほど細心の注意を払っても、払いすぎるということはないのだ。

特に現在の……国王の厄介な外戚に、目の上の瘤よろしく目をつけられている状況にあっては。

「……まあ、仕方ありませんね」

専らからかい倒しているせいで、当の弟からは多分に――玩具扱いされていると――誤解されているファラスース家の次男は、問題を秤にかけた結果、あっさりと『愛して已まない弟の命』を選び取った。

「ほかに方法がない以上、仕方なかろう」

とは、長兄の言葉。

「……ただ、母さんがなあ……なんというか……」

並はずれた指導力で、国内屈指の名門をまとめつづけてきたファラスース侯爵だけが、同時に尋常でない愛妻家としての本音を洩らした。

「「父上っっ！」」

海千山千第二号と第三号の兄弟の非難の声は、綺麗に重なり、空気を震わせたということである……。

「えーっ!?　明日の朝一!?」

部屋に戻るなり、荷造りを始めたアマンシールから、事情を聞いたハーリクの上げた大声は……屋敷の住人にとって、少々迷惑だったかもしれない。

「ハーリク、声大きい。君の声って、女の子みたいに甲高いわけでもないのに、どういうわけか凄く響いて遠くまで聞こえるんだから」

これが、歌劇歌手のような美声なら、なんだか納得できる気もするのだが、決してそういうわけでもないから、不思議としか言いようがない。

「あ、悪ぃ。でも、明日の朝一だなんて、急すぎやしないか？　それじゃあ、クランクレイアさまに言う暇もないじゃないか。あ、それとも、これから行って来るか？

体のことなら、おれ見てられるけど？」

　ハーリクの申し出は、正直、泣きたくなるほど嬉しかったけれど、アマンシールはゆっくりかぶりを振った。

「やめておく。この時刻じゃ、まず間違いなくクランさまは眠ってるはずだし……こんな時間にわざわざ出向いたりしたら、逆に心配かけて、また眠れなくさせちゃうかも知れないから」

　初めて幽体離脱して、彼女を訪れた夜以来、しばらくの間彼女が心配のあまり、睡眠不足に陥ったことを聞いているだけに、なおさら不安がらせるようなことは出来ないと、アマンシールは決めていた。

「そりゃ、まあ、そうだな。グランジェイドは近いとは言えないけど、用件自体は兄貴さんの言うとおり、あっさり片づきそうだし。ある意味、確かにいい機会っちゃーいい機会かも知れないよな。お前、こっちに来て以来、よっぽどの長期休暇でもなけりゃ、グランジェイドに戻ってなかったろ？　コトを決行しちまったら、ほとぼりが冷めるまで、当分は絶対顔出せやしないんだから、後にかける迷惑分含めて、たっぷ

り母ちゃん孝行してきたらいいんじゃねえの？」

コトとは――先日ようやくクランクレイアからも同意を貰えた駆け落ちのことだ。

「そう……だな。確かに」

これはいい機会なのかもしれない。

駆け落ちという行為は……特に、自分とクランクレイアの場合、これまで愛して守ってくれてきた周囲のひとたちすべてを裏切るも同然の行為なのだから。

いや、精神的な負担を考えるならば、自分よりクランクレイアのほうが絶対に大きい。

生まれながらに精霊に愛される資質を持つがゆえに、女神の娘と称えられる一方で、王妹オルレイジアの不貞の末に生まれた子と噂されたクランクレイアは、国王エスライドと王太子フィオーンを、心の底から慕っている。

直接聞いたことはないけれど、このディエーンが危機に陥り、ふたりのどちらか……あるいはふたりともに、「ディエーンの危機だ」と言われたら、きっと自分との恋よりも、ディエーンを守るための政略結婚を選ぶに違いないとわかってしまうほど

には。

だから……心から、うなずいて欲しいと願いながらも、駆け落ちの誘いに応じてくれる可能性は皆無だろうと思っていたのだ。

捕らわれ、縛られているのとは違う。彼女は自らが愛する国王や王太子、このディエーンのために、自分の意志で、そのための道を選ぶに違いないと……思っていた。

けれど、あのとき。

彼女が耳元でささやいてくれた、あの一言。

『駆け落ち、するのだろう？』

夢かと思った。

夢なら、夢でいいとさえ思った。

けれど、どこまでも奇跡のような少女は、さらに惜しみなく言葉と思いを紡いでくれた。

自分が……このアマンシールというちっぽけな存在が、死んで消えてしまうことだけは想像できなくて……否、想像したくもない。そう言って。

『だから……。一緒に行く』

そう、言ってくれた。

あの言葉を耳にした瞬間、アマンシールの中で、彼女は恋人であると同時に、女神に等しい存在になったのだと……告白したら、彼女はいったいなんと返すのだろう？

ひとを勝手に女神扱いするな、と怒るだろうか。

それとも、お前がそう感じるのならいい、と受け容れてくれるのだろうか。

わからない。

けれど。

クランクレイアが……彼女という存在が、大切で大切でかけがえのない存在であることだけは、はっきりわかった——と。

アマンシールは思った。

「できること、できるだけ、頑張るしか、ないよな」

半ば以上、自分に言い聞かせるためにつぶやいた言葉に、ハーリクはごくごく当たり前の態度で「なに、当たり前なこと言ってるんだ？」と返してくれた。



思わず、吹き出してしまった。

「そうか、それって当たり前のことなんだ」

なんでもない会話、なんともない言葉。

そうとしか、これまで認識して来なかったというのに……なのに、こんなにも違う意味合いと響きを以(もっ)て、頭のなかをかき乱されるだなんて、想像もしていなかった。

新しい世界に触れるということは、もしかしたら、こんな、なんでもないはずの日常のなかで、これまで気づいていなかっただけの小さななにかを見つけるようなことなのかもしれない。

それは、いうなれば宝探しの旅とでも呼べるもので……。

ならば、楽しみという宝箱のない人生などないのだと、楽観的ともいえる確信を抱いたアマンシールは、それを生涯(しょうがい)抱きつづけることとなった。

どんなに悲しいときであろうと、どんなに苦しいときであろうと――。

その心を支えたのは、ほんの短い、幸福な日々の記憶で、あるいはひとはそれを『泡沫（うたかた）の日々』と呼ぶのかも知れなかったけれど……。

42

「ひとつ、骨を折ってもらいたい」

突然の呼び出しを受け、王宮を訪れたファラスース侯爵(こうしゃく)リュシアンドは、国王の執務室に入るなり、そう告げられた。

国王エスライドの突然の言葉に、リュシアンドは内心困惑した。

「わたくしにできますことでしたら……」

とは言ったものの、いったいなにを言い出されるのかと、気が気ではなかった。

エスライドはそんな又従兄弟(またいとこ)に、じっと目を向けたまま、幾枚かの肖像画(しょうぞうが)を取り出すと、手招きした。

明らかに見合い用だとわかるそれらに描かれているのは、いずれ劣らぬ美女ばかり

である——もっとも、描かれた当人たちが本当にそうだとは限らないのだが。

「……花のような姫君ばかりですな。どちらの殿下に届けられたものですか」

王太子フィオーンは二十歳、第二王子ケルティスは十九歳——ふたりともまだ婚約者がいないため、どちらに寄せられた話だとしてもおかしくはない。

「上のほうだ。ケルティスはしばらく外に出そうと思っているからな」

初めて聞いた話に、リュシアンドは軽く目を瞠った。

「ケルティス殿下を？　妃殿下はなんと……？」

エスライドの瞳に浮かんだ苦々しげな光が、なにより雄弁な答えだった。

「……いくら癇癪を起こされようと、そろそろ離れてもらわんとな。手紙のやりとりぐらいはするだろうが、いまよりはましだろう。ここをガッシュマサラの離宮にするわけにはいかんのだからな」

未だ祖国こそを第一に考えていることを隠そうともしない王妃ウルスメイアのことを語る時、エスライドの声には苦い響きが宿る。

そして、その王妃が手元で育てた第二王子ケルティスも、ディエーンより祖父の国

に肩入れしている節があり、このふたりが国王の悩みの種であることは、近しい者なら皆が知る事実だった。

「……それは良案とは思いますが……そうお考えでありながら、こちらの姫君方を王太子殿下の花嫁にお迎えなさるおつもりなのですか？　失礼ながら、皆様あちらの国に縁の深い方々のように思われますが……？」

国王に続き、ガッシュマサラの血を引く王太子までもが、かの国と縁深い女性を妻に迎えたのでは、それこそ後宮はガッシュマサラの『小離宮』となってしまうのではないのか――。

当然、そのぐらいのことはわかっているに違いない国王は、苦虫を噛みつぶしたような顔で応じた。

「……ケルティスに妻わせるよりはましだ。そんなことになったら、離宮どころか王宮が引っ越してきて、我が国の玉座の隣に陣取ることになりかねん。ディエーンの法を強硬に主張しておいただけあって、王家の姫は含まれておらんし、后ほどの影響力はない姫ばかりだしな」

王の言葉に、リュシアンドはなるほどとうなずいた。

ガッシュマサラ王家直系のウルスメイアを娶ったエスライドは、妻の祖国を刺激しないために、側室ひとり迎えてはいない。おかげでディエーンの後宮は――クランクレイアには王女宮が与えられているため――文字通りウルスメイアの城となっているのだ。

ガッシュマサラ国王オルキン三世としては、外孫である王子にも自国の王女を嫁がせたかったに違いないが、ディエーンには四親等以内の婚姻を禁じる法がある。王子たちの従姉妹に当たる姫を、送りつけることはできないのだ。

つまり、それはガッシュマサラ王家直系に連なる家系の女性は除外されるということを意味し、たとえ迎えたところでウルスメイアほどの影響力を懸念する必要はないというわけだ。

「舅殿は、油断のならない御仁だからな、ケルティスを完全に取り込む機会を、虎視眈々と狙っておられる。我が国の王子をひとり横取りされるよりは、多少の毒なら腹も壊さん丈夫な息子に食わせたほうがましというものだろう」

フィオーンへの信頼を窺わせる言葉だったが、どうにも単語の選択が悪い。

「……陛下、その言い様はあまりに……」

やんわりと窘めるが、エスライドは気に掛けた様子もない。

「丈夫で頼もしい息子だと言っているのだ。しかし、あやつも后の気の強さには、ほとほと嫌気がさしておるようでな、同じ国の娘だというだけで、何度言っても肖像画を見ようともせんのだ」

どうやら、そこで先ほどの「骨を折ってほしい」発言が出たらしい。

とてつもない難題に、リュシアンドは思わず顔を顰めた。

「……陛下。わたくしにも、出来ることと出来ぬことがございます。陛下のお言葉にもうなずかれようとなさらない殿下に、いったいわたくしがなにを言えるとお思いですか？」

そんな問題を丸投げされても困る——リュシアンドは断固拒否の態度を心に決めた。

しかし、エスライドは意外な人物の名を上げたのだ。

「違う、違う。説得を頼みたいのは、そなたの末息子のガジェストリオだ。フィオーンのやつが、実の弟以上に気に入って可愛がっておるからの。可愛い弟分の頼みなら、肖像画に目を通すぐらいのことは承知するかもしれん。見たところ、后ほど気の強そうな娘はおらんようだからな、そうとわかれば、あれも多少は考えるだろう」

リュシアンドは小さく息をついた。

「……陛下。無謀な試みだとはっきり断言いたします。我が家の末っ子はさんざん殿下の手の上で転がされたあげく、『ならそなたが見ればいい』とでも言われて、すごすご退散するに決まっております。試すだけ無駄なことです」

父としてリュシアンドはもちろん、三人の息子を心から愛していたが、その愛情は贔屓目を招くような種類のものではなかった。

ガジェストリオ・アマンシールをダランジェイドに向かわせるために、ファバルワースが口にした「融通がきかない不器用者」という三男坊評は、そっくりそのまま彼が抱いているものでもあったのだ。

「……そうかのう。となると、後はクランに頼むぐらいしか手は残っておらぬのだが

……そうそう、たまにはガジェストリオを王宮に出してやってはくれぬか？　クランが淋しがっておる。あの子の笑顔が曇るのを目にするのはたまらんからな」

溺愛する娘を思う父親の顔で、再び出されたその名に、リュシアンドは内心ぎくりとするものを覚えた。

この時期に、殊更アマンシールの名を口にする国王の真意がいずこにあるのか、リュシアンドとしては、無関心ではいられなかった。

（探りを入れるべきか、それとも……）

数瞬悩んだものの、彼は聞き流す――風を装う――ことにした。

ガッシュマサラの脅威から、身を張ってこのディエーンを守り抜いてきた国王を、甘く見るなど言語道断の選択だ。徒に藪をつつく真似は控えるべきだった。

「……申し訳ございません。実は故郷で、妻が体調を崩しまして、見舞いに向かわせたばかりなのです……なにしろ、手の空いている息子はあれひとりだったものですから」

この言葉は、意図せずして、リュシアンドを助けることとなった。

即位前の王太子時代、妻とも交友のあったエスライドは、そちらに関心を移したのだ。

「なんと、アイシア殿が？　大丈夫なのか？　又従兄弟殿は帰らずともよいのか？」

「先の長雨で引き込んだ風邪が長引いているようです。大事ないとは聞きましたが、息子はしばらく戻っておりませんでしたし、いい機会かと思いまして……」

リュシアンドの答えに、国王はほっとしたようにうなずいた。

「そうか……決して無理をせず、体を労るよう、伝えてくれ。彼女はわたしの詩歌の恩師だからな」

昔を思い出してか、目を細める国王に、リュシアンドは微笑みながらうなずいた。

「もったいないお言葉でございます」

そうして、深く頭を下げたとき、彼の耳は、扉の向こうから小さな音を拾った。

（……誰か、聞き耳を立てていたのか？）

しかしそれに気づいたのは彼ひとりであったらしい。

「どうかしたのか、又従兄弟殿？」

訝りの声を上げたエスライドに、リュシアンドは「いいえ」とかぶりをふった。
しかしその瞳には、なにかを懸念する、鋭い光が浮かんでいた……。

（なんということだ……！）
偶然耳にした情報に、『彼』は動揺を抑えきれなかった。
（この時期に、ガジェストリオがこのロスタロイドを離れるとは……！）
ファラスース邸を見張らせている配下からは、そんな報告を受けてはいなかった。
（これだから、あの一族は……）
油断がならないのだと、『彼』は唇を噛みしめた。
ファラスース侯爵の言葉を思い出す――いつ出立したか、口にしない侯爵の如才なさが憎らしくさえあった。
せめて顔が見えれば、なにかを読み取ることができたかもしれないが、扉の外から

では、声を拾うのがやっとだった。それでも収穫と言えないこともないが、『彼』はその言葉を鵜呑みにする危険性にも気づいていた。

外交にあって、卓抜した手腕を発揮するファラスース侯爵は、駆け引きの達人であり、虚実織り交ぜての話術を得意とする。彼との会話でふと気を抜いたがために、まんまと全ての条件を呑まされた者は決して少なくはない。

温厚そうに見える人柄やその容姿、巧みには聞こえない言葉運びに惑わされてはならない。誠実な顔をしてひとを罠にかけることを躊躇わないからこそ、彼はディエーンの外交の柱と呼ばれているのだから。

なんにせよ、早急に手を打たなければならない、と『彼』は思った。

本当にガジェストリオ・アマンシールがロスタロイドを出たのなら、すぐにでも追っ手を向かわせるか、呼び戻すかしなければならない。刺客に狙われた末子を、たかが見舞いのためにあの侯爵がひとりで送り出すはずはないのだから。

行き先にしても、ダランジェイドとは限らない。あらゆる可能性を考慮する必要があった。

しばし、いらいらと室内を歩き回った後、『彼』は机に向かい、何事かを素早く書き綴った。蠟で封をし、『彼』は外へ向かう——ガジェストリオがどこにいようとも、必ずこの手紙を届けてくれる運び手のいる場所へと。

（ガジェストリオ……お前に罪はない……）

けれど、その命は『彼』にとってはつみ取らなければならないものなのだ。

許しを求める気持ちなど、『彼』にはない。

為すべきことを為すだけだ。たとえ、それが神の意に反する行為であろうとも。

自らの信念という神を胸に、『彼』は三つ目の命に手を伸ばした……。

43

自宅の窓から空を見上げながら、ファバルワースは弟のことを思った。
「いま、どのあたりかな……」
自分たちの言葉を疑いもせず、ダランジェイドへ向けて出立したアマンシールは、馬で移動しているはずだ。
もしかしたら、二度と戻れぬ道とも知らずに。
それしか方法はなかったのだから、悔いるつもりはないが、あの弟の屈託のない笑顔を、見られなくなるかもしれないと思うと、やはり淋しさは禁じ得ない。
もちろん、全てことが上手く運べば、自分たちは彼を取り戻すことができるだろう。そのために、愛する彼を偽り、この家から送り出したのだから。

（だが、もしも上手くいかなかったら……）

その時は、自分たちは永遠に家族の一員を失うことになるのだ――それも、自分たちが選んだ道のために。

なかでも最も責められるべきは自分だろう……この時を逃せば次はないと、父と兄を説得したのだから。

（けれど、ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスースという人間を殺せるのは、今しかなかったんだ……）

生きていれば、早晩凶手にかかるのは目に見えていた弟を救うためには、皮肉だが、その弟を殺すしか方法はなかった。

（急げよ、アマンシール。ダランジェイドに着きさえすれば、お前は新たな生を得ることができる）

もっとも、それを彼が喜ぶかどうかは微妙だが。

（後でいくらでもわたしたちのことを恨んでいいから……とにかく、急いでくれ）

祈るような思いで、再び空を見上げたファバルワースは、玄関のほうがざわめいて

いるのに気づいた。

「お客様、お待ちください！」

執事のルイヴァースが、慌てた声を上げているのを耳にし、ファバルワースはとんでもない厄介事が訪れたことを確信した。

果たして、取り次ぎを待つことなく、無遠慮に階段を上ってきた人物の姿を見た瞬間、彼は自分の運の悪さに泣きたくなった。なぜ、よりにもよって、ここで彼に行き当たった最初の当事者が、自分でなければならなかったのか……神官への道こそ選ばなかったが、余人よりは格段に信心深いと自認している彼にとって――同時に人の数倍罪深い自覚もあったが、その矛盾に苦しむような繊細さは、彼の持ち合わせの中にはない――怒れる客人の姿は、まさしく神の具現に他ならなかった。

「よう、いたな、次男坊」

お世辞にも、品がいいとは言えない口調で、客人――ギスカリールは声をかけてきた。

口元に浮かぶのは、獰猛な笑みだ。獲物を見いだした猛禽さながらの彼の瞳を目に

した瞬間、ファバルワースは天を仰ぎたくなった。

しかし、怒りの炎を身に纏った神の眷属は、そんなささやかな自由さえ、彼に許してはくれなかった。

くい、と顎をしゃくるようにして、ギスカリールは背筋が凍るような冷ややかな声で、問答無用にこう告げた。

「ちょっと、顔を貸せ」

諦めるしかない状況で、ファバルワースはひとつ、息を洩らした。

ギスカリールに引っ張られるように――心境的には拉致された、というほうが近かったが――ファバルワースが連れて行かれたのは、ロスタロイド郊外の小さな森のなかに建てられた、小さな一軒家だった。

他国の柱神の近しい縁者という触れ込みのギスカリールは、彼自身がそうだと聞か

されても納得するぐらい、特殊な人物でもあった。

末弟は知らないことだが、ファバルワースが彼に初めて会ったのは十歳の時だったのだが、彼の外見はそのときからほとんど変化していないのだ。因みに五歳年長の兄が七つのころ出会ってからも、ほとんど変化していないということだ。つまり、ギスカリールは確実にここ二十年ほど、年を取っていないのだ。

「……あなたの持ち家ですか？」

柱神の縁者ということで、どの屋敷でも客人としてもてなされるギスカリールは、ロスタロイドに借り部屋さえ持っていなかったはずなので、意外な思いで尋ねると、はたして妖怪万年青年は「いいや」とかぶりを振った。

「母の隠れ家だ。たまに、誰にも邪魔されずに本を読みたいとき利用してるらしい」

二十年以上、時の止まったこの青年の母親とは、いったいどれほどの高齢なのか——と、興味を覚えなかったといえば嘘になるが、聞くだけ心臓に負担がかかりそうだと判断し、ファバルワースは賢く沈黙を守った。

もっとも、絶対に守りたい沈黙に関しては、ギスカリールが守らせてはくれないだ

ろうという、悲しい確信はあったのだが。

案の定、一杯の茶を用意すると、ギスカリールはテーブルを挟み、ファバルワースの正面に位置する椅子に腰を下ろした。

「さて、ここなら邪魔も入らないことだし、家人の前で体面を潰される心配もない。話してもらおうか……いったい、なにを企んでいる？」

白を切っても無駄であることはわかっていたが、だからと言って、促されるままに答えるのも癪だったので、ファバルワースは逆に切り返した。

「……あなたこそ、うちのまだまだ世間知らずの末っ子に、なにを吹き込んで下さったんですか？」

口に出した途端、確かにそのことで、自分が目の前の青年に対して、苛立ちと憤りを覚えていたことを自覚し、少しだけ力が湧いてきた。

しかし、実際何歳なのか見当もつかない妖怪人間は、その程度の突っ込みでどうこうなってくれるような可愛げ皆無の化け物だった。

「吹き込むなんて、人聞きの悪い。おれは友人の愛娘とその恋人には、是非とも幸せ

を摑んで欲しいと思って、豊かな経験を元に、適切な忠告をしてやっただけだぞ」

茶化すような口調だったが、だからと言って、こちらに向けた質問を忘れていないことがはっきりとわかる態度だった。

「……無駄に豊かな経験、の間違いでしょう？　言葉は正確に使ってください。それに、そういうことなら、わたしだって同じことを主張しますよ。……わたし……わたしたちだって、アマンシールが愛しいんです。だからこそ、断腸の思いで決断したんです。あなたに文句を言われる筋合いはありません！」

思いがけずに叫んでしまったことで、自分の方こそが冷静さを失いつつあることに気づかされ、ファバルワースは思わず唇を噛んだ。

ひとを煙に巻くことでは、人後に落ちない自信があったのだが、人外相手では、勝手が違うということか……。

苛立たしいやら気恥ずかしいやら、なんとも落ち着かない気分で、ファバルワースはそっと相手から目を逸らした。

それが、敗北を意味することは——少なくともそう受け止められてしまってもおか

しくないことはわかっていたのだけれど。

しかし、ファバルワースの予想に反して、ギスカリールはかさにかかって問いつめるような真似はしなかった。

「お前たちが、あいつを大事に思ってることぐらいはわかってるさ。よっぽどぎりぎりの状況に追いつめられでもしない限り、あいつを切り捨てたりしないこともな。だが、お前たちはあいつの命を救うことにばかり目がいってて、視野が狭くなってる。マルシアスのファリネスという一番厄介な次代候補が死んでしまったことで、なおさらな。こうなった以上、国のためにもファラスースのためにも、ガジェストリオ・アマンシールっていう、次代候補は存在自体、毒にしかならない……だから、お前らはその存在を消そうと思ったんだろう？」

白状しろ――と言ったくせに、実は全部見通しているではないか、この男は！

（なんてイヤな男なんだ……）

むかむかすると同時に、またしても力が湧いてきた――怒りは時に、大きな原動力となる。

「そうですよ！　おっしゃる通り、『貴神の午睡』が見つかっていない今ならば、ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスースという存在を抹殺するのは簡単だと……いいえ、今しかその機会はないと思ったから、あいつを騙して、ダランジェイドへ向かわせたんですよ！　あちらに着くなり、手配した賊に襲わせて……死んだ事実を作り上げるために！　半身と定めたものの、いまだ直に触れあっていない相手が死亡した場合に限り、神宝は新たな候補を選び出すことがある……。名を変え、別の人生を歩んできた『別人』としてならば、再び次代候補に挙げられたところで、脅威と見なされる可能性は低くなる……ファラスース家にとって、アマンシールが危険な存在なんじゃありません。アマンシールにとって、ファラスース家が、危険なんです。その制約から、あの子を解放してやることが、わたしたちにできる精一杯のことなんです！」

　ほかに、どんな仕様があると言うんですか!?

　血を吐くような叫びに、しかし感慨を受けた様子もなく、ギスカリールは淡々と答えた。

「……お前たちの言いたいことは、わからないでもないがな。だが、命はともかく、心の方はどうなるんだ？　どうせお前らのことだから、二代か三代前の国王の落胤の子供か孫かって設定作ってるんだろうけどな。確かにそれで、アマンシールの命は保証されるかもしれないが……クラン嬢との恋はどうするつもりだったんだよ？　若いふたりだから本物じゃないだろうなんて言うなよ？　おれが、お前らのことを怒ってるのは、良かれと思ったからにしろ、お前らがあのふたりの意見を聞こうともせずに勝手に話を進めようとしたからだ。せめてどちらかの意見を聞いた上でのだまし討ちだったのなら、おれだって、ここまでは怒り心頭に発したりしなかったよ」

　責めるというより、宥めるような、慰撫するような――不思議な空気を放ちながらのギスカリールの言葉に、ファバルワースはいらいらどころでなく、キレた。

「……なにを偉そうに……！　わたしたちの決断を一方的に責めるあなたは、アマンシールの命とその恋の両方を守ってやれる、どんな良案をお持ちだと言うんです!?　実現不可能なことを、他人に求めるのはやめてくれませんか!?」

　自分でも意外なほどに、感情的になっているという自覚はあった。

だが、自分も兄も父も、極限まで考え抜いて、これしかないと思った結論を、近視眼的なものだと断じられたのでは、到底黙ってはいられなかった。

しかし……化け物は、やはり化け物で。

あっさりと、アマンシールの命と恋の両得が可能な、唯一とも言える答えを返してくれたのである。

「打つ手も持たないのに、他人ばっかり責めるような真似、するわけないだろ」

そう前置きした後、ギスカリールが末弟に提案したという内容を聞いた瞬間、ファバルワースは頭の中が真っ白に燃え尽きたかのような錯覚に見舞われた。

「……駆け落ち、ですって!?」

あまりにも想像外の事実を告げられた場合、ひとの頭というものは、考えることを放棄してしまうこともある……らしい。

「なにを馬鹿なことを……」

言いかけ、けれど最後まで言葉を連ねることのできなかったファバルワースに対し、「どこが馬鹿なんだ?」と平然と応じた時点で、ギスカリールの勝利は揺るがぬ

ものとなっていた。

「身内に実際に柱神がいる者として、言わせてもらうが……はっきり言って、お前らのやり方は穴ぼこだらけだ。危険にさらされたとき、強い執着を抱く者ほど、尋常では考えられない力を発揮したりするんだ。マルシアスのファリネスの線が消えた今、どの勢力が一番危険なのか、わからんお前じゃないだろう」

わかったなら、至急呼び戻せ。

高圧的な口調で命じられたにも拘わらず、この時ファバルワースは自分でも意外に思うほどに、反発を覚えなかった。

そして、その感覚は、生涯を通じて不変のものへと変化していったのだ……。

44

ロスタロイドを出て三日目の朝――。

折良く行き当たった町の宿の寝台で、窓から射し込んでくる朝日を全身に浴びながら目覚めたアマンシールは、窓辺に立つと、ロスタロイドのある方向を見つめた。

脳裏に浮かぶのは、愛しい少女の顔だ。

（クランさま……いまごろ、どうなさってるかな？　まさか、久しぶりだからとか理由をつけて、空の散歩なんてなさってないよな？）

空を翔けて駆け落ちしよう、と言った少女の性格を考えると、どうもありそうに思えて不安になる。

アマンシールが頼みこんで以来、三年以上空の散歩を控えているはずだから、勘を

取り戻すためと称して、練習に勤しむぐらいのことは目論んでいそうで、そういう意味では、自分がロスタロイドを離れたいまは、絶好の機会だと思っているかもしれない。

考えれば考えるだけ、不安が大きく育っていく。

（ああ、こんなことなら、戻ったら一緒に練習するから、くれぐれもひとりで空飛ばないでくださいって、ハーリクに言づて頼んでおくんだった……。大体、練習が必要なのは、わたしのほうだし……そうだよ、考えてみたら、生身で飛んだことないんだから、いっぱい練習しないといけないんじゃないか！）

「……なんで、朝になってから気づくかな、わたしは……」

もっと早く気づいていたら、出立した日の夜からでも、風霊に頼んで練習を始められたというのに――。

悔いる気持ちを、アマンシールはしかし振り切るようにかぶりをふった。

（いや、まだ遅くない。ダランジェイドまであと三日、捕まった男のこと調べるときは、夜遅くまでかかるかもしれないから無理かもしれないけど、帰りは毎日練習でき

るはずで……）

翌日の移動に差し障りが出ない程度の時間を割いたとして、どれぐらい上達するかはわからないが、しないよりはましだろうと、算段を組む。

当面ふたりが隠れ住む場所は、ギスカリールが手配してくれることになっている。更には世間に馴染むまで――なにしろ、クランクレイアは生粋の深窓育ちだし、アマンシールも大貴族の息子なので、生活面においては世間知らずもいいところなのだ――教師まで用意してくれているらしい。

最初、そこまで面倒はかけられないと、アマンシールは断ろうとしたのだが、あっさりとギスカリールに一蹴されたのだ。

『馬ー鹿。お前たちみたいなふたりが、そのまま街に出たりしたら、人の目を引きまくって、あっという間に見つかるに決まってるじゃないか』

……反論の余地はなかった。

確かに、ふたりで暮らしていく上で、完全自給自足態勢を取るのは無理がある。となれば、どうしてもひとに交わる必要は生じるわけで、周囲の不審を買わない程度の

一般常識はふたりとも習得しておくべきだった。

生活のために働くともなれば尚更だ。

『いざとなったら、助けてやるから』

と、ギスカリールは言ってくれたが、アマンシールにそのつもりはなかった。

周囲に助けてもらうことと、まるごと背負ってもらうことは違う。自分の足で立って歩かなければ、自分たちの本気を、きっと誰も信じてはくれない。それでは意味がない。

もっとも――。

『それでも、必ず見つかることだけはわかっておけよ？　神宝が見つかり、新たな選定者が立ったら、お前にはもう、ほかに道がないんだからな』

そう、ギスカリールには念を押されたのだけれど。

柱神になるということが、いったいどういうことなのか、正直なところ、アマンシールにはまだよくわからない。

最初に候補に選ばれたと知ったときには、なぜ自分がと思ったし、御免だとも思っ

た。辞退できないなんてあんまりだと腹も立てた。事実を知られたときの周囲の反応が恐ろしくて不安を覚えて……しかも、そのせいで殺されそうになった挙げ句、庇ってくれたハーリクが死にそうになった時には、自分自身を呪いさえした。

それでも、たったひとつだけ、良かったと思えるのは、自分が候補に選ばれたときの、父や兄たちの反応だった。

ほかの候補たちと顔を合わせて話したことがないから、はっきりしたことはわからないが、もし、あのとき兄たちが、手を打って喜んだりしたら、きっと心のどこかが壊れたに違いない。玉座への欲望を持たない家族であったこと――それが一番の救いだった。

（だから……そう、きっと大丈夫だ……）

今度の柱神の交代劇で、大量の血が流される事態は……クランクレイアを悲しませるようなことは、きっと起こらない。

「よし。まずは今日も頑張って進むぞー」

そして、夜は空飛ぶ特訓だ、とこぶしを握って決意を固めたアマンシールは、窓の

外をよぎった白い影に「え?」と声を上げた。

(風霊……? え、なんかこっちを目指して飛んできてる……? しかも、なにか白いものを持って……)

風霊の姿が近づくにつれ、その手に握られたものが、白い封筒であることがわかった。

風霊に『お遣い』を頼める人間の心当たりなどひとりしかいないアマンシールは、慌てて窓を開き、風霊を招き入れた。

そして、受け取った手紙の内容を目にした瞬間——。

「風霊!」

叫ぶと同時に、開けはなった窓から身を乗り出し、アマンシールは大声で呼びかけた。

「風霊たち、頼む! わたしをすぐにロスタロイドに……王宮に連れて行ってくれ!」

コーランジュの屋敷へとつづく道を、クランクレイアはひとりで歩いていた。
ひとりで出歩かないようにと、兄からは言われていたが、柱神（ちゅうしん）である女性を訪れるのに、侍女を連れていくわけにはいかないので、ライラーナには境界近くの四阿（あずまや）で待ってもらうことにした。
けれど、やはり今日も、呼びかけに答える声は聞こえず、精霊たちによって築かれた結界（けっかい）が開かれる気配はなかった。
もう、一年近く、コーランジュには会えずにいる。
「当代さま……」
（せめて一目なりともお会いしたいのに……）
相談に乗ってもらうとか、頼みたいことがあるというわけではない。心配で……元気な姿を見て、安心したいだけなのだ。
けれど、それがかなわないということは――。

（そんなに弱ってらっしゃるの……？）

柱神もまた、永遠の命を約束されているわけではない。

時を終えれば、彼らもまた土に還る――それはわかってはいるけれど、なぜそれがこの時期でなければならないのか……切なくて、悲しい。

（兄上やライラーナには言うわけにはいかないけれど、アマンシールとのことを、当代さまにだけは打ち明けておきたかったのに……）

彼と、駆け落ちすることを――。

けれど、もしかしたら会えないまま、告げずにいたほうがいいのかもしれない、とクランクレイアは思い直した。

（ご心配をおかけするだけかも知れないし）

ただでさえ弱っている女性に、負担をかけるべきではない。

そう、自身を納得させて、クランクレイアは踵（きびす）を返したが、その時つま先にこつんとなにかが当たる感触に、思わず、足下へ目を向けた。

青々とした草に埋もれるように、銀の指輪が落ちていた。

黒ずみもせず、艶やかな輝きを放つそれは、ここに落ちてからまだ時間が経っていないことを意味する。

「こんなところまで、いったい誰が……？」

つぶやきながら、指輪を拾い上げたクランクレイアは、はっと息を呑んだ。

見覚えがあったのだ。

それは、彼女も持っている指輪だった。コーランジュに、あるひとと一緒に贈り物をした時、彼女からお礼にと渡されたものだ。

石ひとつついていない簡素なそれには、けれど普通の指輪にはない、特別な祝福の力がこめられていた。

『三人だけの秘密よ』

悪戯っぽい笑顔で、コーランジュが教えてくれたこと――。

『本当に必要だと思ったとき、指輪に向かってお願いしなさい。精霊がその望みをかなえてくれるわ。けれど、いいこと、一度きりよ』

クランクレイアはまだ、その『一度』を使っていなかった。

一生使うつもりもなかった。コーランジュの思いのこもった大切な宝物だったから。

けれど——拾った、その指輪は。

「祝福の象眼が消えてる……」

それは、力を使えば消えてしまうと、教えられた金の飾り文字——。

自分の指輪でない以上、これの持ち主はひとりしかいない。そして、そのひとは一度きりの願いを口にしたことになる。

どくん、と動悸が激しくなった。

「……どうして……なにを……」

それも、わざわざこんな人気のない場所に足を運んで——。

あのひとは、いったいなにを願ったというのか。

「聞か、なきゃ……」

指輪をぎゅっと握りしめ、クランクレイアは王宮に駆け戻ろうとした。

しかし、その瞬間——!

『……クラン……』

背後から、呼び止める声が聞こえた。

振り返ったクランクレイアは、そこに見いだしたひとの姿に、驚愕(きょうがく)の声を上げた。

「当代さま！」

実体を伴わぬ、陽炎(かげろう)のような姿で、当代柱神コーランジュが立っていた。

「そのお姿……どうなさったんですか!?」

しかし、コーランジュはその問いには答えず、必死な顔で訴えかけてきた。

『行って……あの子を止めて！　このままでは、取り返しのつかないことになってしまう……！』

あの子とは誰なのか――問うより先に、コーランジュの意を汲(く)んだ風霊によって、クランクレイアはすべてを知らされた。

脳裏(のうり)に、その風霊が目にした光景が映し出される。

銀の指輪を手に、願いを口にする、あのひと。

現れた風霊に、手紙を差し出すあのひと。

『一刻も早く渡してくれ……そして、彼からの問いには決して答えてはいけない』

と、告げたあのひと。

風霊が飛び去るのを、これまで見たことのない、恐ろしい顔で見送るあのひと。

得体の知れない不安と恐怖に胸をしめつけられるのを感じながら、彼女は叫んだ。

「風霊、お願い！　兄上を……っっっ！」

捜して――と。

叫ぶと同時に、彼女は空に駆け出した――一度きり、願いをかなえてくれる指輪を取りに行くために。

いまがその時なのだと、クランクレイアは確信していた。

45

「急いで！　お願いだから！」

風霊（ふうれい）のひとりの首にしがみついた格好で、アマンシールは叫んだ。

求めに応じ、風霊たちは凄（すさ）まじい速度で彼を運んでくれる――うつむかなければ、息をするのも難しいぐらいの速さで。

けれど、それでもアマンシールは「もっと、もっと」と言わずにはいられなかった。

風霊によって届けられた手紙の内容が、その理由だった。

――クランが奥庭にて大けがを負った。意識が戻らない。すぐに来てくれ、奥庭の

入り口にて待つ。

用件のみの簡潔な内容が、事態の重大さを物語っており、アマンシールは気が気ではなかった。

（クランさま……怪我だなんて……）

やはり、空飛ぶ練習を始めていたのだろうか――久しぶりで、加減を間違って、初めて会ったときのように、空中に放り出されてしまったのだろうか……。

手紙を携えてきた風霊に、詳しく尋ねようとしたが、相手はかぶりをふるだけで、なにも話そうとはしてくれなかった。精霊のなかにも、波長の合う相手と合わない相手があり、全部の精霊と意志の疎通がはかれるわけではないのだと、以前クランクレイアが言っていたから、もしかしたら後者なのかもしれない、とアマンシールは思った。

そのことが、残念でならない。

もしも前者であったなら、そのときの詳しい事情を聞き出すこともできただろう

に。

（ああ、どうか……クランさま。クランさま、無事で……！）

無事なわけがないのだが、そう思わずにいられないほど、アマンシールは動転しきっていた。

（神様……クランさまを助けてください。彼女はまだ、たったの十四年しか生きてないんです。これからのひとなんです！　お願いです……どうか彼女を助けてください！）

これほど真剣に祈ったことは、もしかしたら生まれて初めてかもしれなかった。

「お願いだ……もっと早く！」

風に体温を奪われるのも構わず、アマンシールは風霊に告げた。

こちらの言葉は伝わるらしく、風霊は彼の言葉通り、速度を増した。

（クランさま……！）

ただ少女の命だけを思い、彼は風霊にしがみつく腕に、ぎゅっと力をこめた――。

馬で三日かかった距離も、風に乗ったら二時ほどだった。
手紙に記されていた待ち合わせ場所に、風霊が下ろしてくれたとき、アマンシールの体は冷え切り、すぐには立ち上がることもできないほどに強ばっていた。
「ジェス！」
手紙の主が、王宮につづく小道のほうから声をかけてきた。
「殿下」
ほっと息をつき、アマンシールは笑いそうになる膝に力をこめ、立ち上がった。
「早かったな、もう少しかかるかと思ったが……」
「あ、いえ、別に早くは……」
と言いかけ、相手は自分の移動方法を知るはずがないことを思い出す。
風霊の姿を認識できるようになったのは、つい先日のことで、それ以前は見るどころか感じることもできないと、ことあるごとに繰り返していたわけだから、通常の手

段で駆けつけたと思ったのだろう、と見当をつける。
それはそれでおかしな点があったのだが、気が急いているアマンシールはそのことに気づかなかった。
「それより、殿下、クランさまは……!?」
蒼白な顔で問いかけると、近づいてきた青年は、沈痛な面持ちで「こちらだ」と、王宮とは逆方向を指さし、歩き出した。
（こちら……って、コーランジュさまのお屋敷がある方向……？）
当代柱神である女性とは、意識だけの形で先日会ったばかりだった。
そのとき彼女は、もう、生身の体は言葉を紡ぐことさえ難しいと言っていた……そんな彼女の屋敷に、クランクレイアを運びこんだというのだろうか。
（もしかして、コーランジュさまは、ご自分の状態を陛下や殿下にはお伝えしてらっしゃらないんだろうか……？）
きっとそうに違いない、と思った。
同時に、クランクレイアのことがますます心配になった。柱神の力に縋らざるを得

ないほどにひどい怪我を負ったというのなら、彼女の容態は予断を許さないということになる。しかも救いの力を期待されているコーランジュは、すでに起きあがることもできないほどに弱っているのだ。

不安と恐怖に、胸が掻きむしられる。

まだよく動いてくれない足にむち打つようにして、アマンシールは前を歩く相手に問いかけた。

「殿下。クランさまの意識は、まだ戻らないままなんですか？　怪我とは、いったいどこを……？　出血はひどいのですか、骨に異常はないんですか？」

矢継ぎ早に質問を投げかけるが、青年は答えようとしない。

（まさか……）

最悪の事態を想像し、アマンシールはぶるりと肩を震わせた。

「……殿下！」

叫び、彼の隣に並ぼうと、足を早めたまさにその時――。

肌を切り裂くような、強烈な殺気を感じた。

（え!?）

考えるより先に、体のほうが反応した。

反射的に後ろに飛びすさったアマンシールは、一瞬前まで自分が立っていた場所で輝きを放っているものを、信じられない思いで見つめた。

それは――抜き身の剣だった。前を歩いていた青年――王太子フィオーン・コンシャス・ディアス・エルスース・ディエーンが、振り向きざまに斬りつけてきたのだ。

「殿下!?」

信じられない思いで、呆然とつぶやいた彼を、フィオーンは冷ややかな目で見つめていた。

そこに浮かぶ殺意の色は、ちらりとも揺らぐことがない。

（本気だ）

いやでも、アマンシールはそう悟らざるを得なかった。

（殿下は、本気でわたしを殺そうとしている……）

あの手紙は偽りだったのか。

クランクレイアは無事なのか。

聞きたいことは、いろいろあるはずなのに、アマンシールが口にしたのは……できたのは、たった一言だった。

「……なぜなんですか？」

「なぜ？」

フィオーンは、皮肉な笑みを口元にたたえ、あざ笑うかのように問い返してきた。

「なぜか、だって!?　それは逆にわたしのほうが聞きたいぐらいだよ、ジェス……いや、ガジェストリオ・アマンシール・アルス・ファラスース！　次代の柱神に選ばれたことを隠し通し、お前は……お前たち一族は、なにを企んでいた？」

厳しい糾弾の声に、気圧されそうになりながらも、それでもアマンシールは必死に訴えた。

「なにも企んでなんかいません！　確かに、選ばれたことを知られてしまうのを恐れました……でもそれは、玉座を狙っていると誤解されるのが怖かったからです！　わたしも、父も兄たちも、玉座など欲しくありません！」

しかし、その言葉はフィオーンの胸には届かない。
「誰がそんな戯言を信じると思うのだ。よしんば事実だったとしても、それがなんの意味を持つというんだ。お前は、自分の一族が、どれほどの影響力を持っているのか知らないのか？　ファラスースが、どれほどに慕われ、またどれほどに憎まれているのか……。お前の存在が明らかになった時点で、この国は必ず割れるのだ！」
「そうはなりません！　そうしないために、父も兄たちもずっと準備してきたんです！　国が割れて苦しむのは民なのだからと……わたしが選ばれる以前から、二度と内乱が繰り返されないように、父たちは……っっ！」
懸命に訴えたが、フィオーンの殺意が薄れることはなかった。
（駄目か……駄目なのか？　このひとに、信じてもらうことは無理なのか……）
絶望にも似た悲しみが、アマンシールの胸を満たした。
そんな彼の心中に気づいたのか、フィオーンの瞳が、一瞬揺れた。
「……わたしひとりが、信じたところで無駄なのだ」
絞り出すように紡がれた声には、苦渋の響きが溢れていた。

「お前たち一族の赤心を、わたしや父上だけが信じても、流れを変えることはできないのだ。特にガッシュマサラのオルキン三世は、侯爵の外交手腕で、何度もディエーンに干渉する機会を潰され、苦々しく思っている……このことを知れば、確実に手を出してくるだろう。またガッシュマサラに好意的でない諸侯たちは、これ幸いと紐付きの王家を見限るだろう。わからないのか、国という生き物が大きく動くとき、個人の意志や決意など、たやすく押しつぶされてしまうのだ」

真実がなんであろうと、流れが変わることはないのだと――告げられ、アマンシールは打ちのめされた。

「……殿下……」

「マルシアス家のファリネス亡きいま、嵐の種となるのはお前だけだ……ほかの候補たちの誰が選ばれようと、まだ、いまのエルスースなら、押さえ込むことができる……ただ、お前だけが、ファラスースだけが、ディエーンを危機に陥れるのだ……」

そうである以上、禍根の芽は摘むしかない――言外の言葉を、アマンシールははっきりと聞いたような気がした。

（このひとは、もう揺るがない……）

そう、確信した。

アマンシールにもその家族にも、玉座を狙う意志などないことを、恐らく誰より知っているのは、もしかしたらフィオーンなのかもしれない。

けれど、見えすぎる目と、統治者としての使命感は、感情とは別の部分で、彼に選択と決断を迫ったのだろう。

柱神の交代と同時期に、これまで繰り返されてきた内乱を防ぎ、そのことでガッシュマサラの脅威からディエーンを守る、そのために。

（多分、ファリネスやセディシャ卿も……もしかしたら、ノーシャンに襲われたあの件も、このひとの差し金だったのかもしれない……）

そう思ったけれど、アマンシールはどうしてもフィオーンを非難する気にも、恨む気にもなれなかった——殺されようとしている今となっても。

決して死にたいわけではなかった……諦めて、観念したわけでも。

生きたいとはもちろん思う。クランクレイアとともに、時に笑って、時に泣いて

……もしかしたら時々喧嘩したりもして。ずっと手を離すことなく、最期のときまで一緒に。

けれど、それとは別の、心のどこかで（仕方ない）とも思った。

「なぜ」

不意に、フィオーンが乾いた声を洩らした。

「なぜ、お前だったのだろうな……」

感情を読み取れない、木枯らしのような声だと思った。

そうして、フィオーンは話は終わったとばかりに、剣を振り上げた。

アマンシールは目を閉じなかった。

一瞬の後、訪れる永遠の別れを、ふたりとも信じて疑わなかった——ふたりがともに、愛して已まない少女が、突然ふたりの間に出現するその寸前まで！

「ジェスっ！　兄上っっ！　駄目、やめて、やめてぇぇっっっ！」

コーランジュから贈られた指輪の力を用い、空間そのものを飛び越えて現れた少女の姿に、アマンシールとフィオーンは驚愕と恐怖の声を上げた。

「クラン!?」
「クランさまっ！」
振り下ろされる剣が、少女の体に届く、まさにその刹那――！
雲ひとつない蒼穹から、黄金の雷が大地に向かって走り抜けた。

晴天下における落雷がもたらした事態の真相は、王家と神殿によって完全に秘匿された。
落雷地点が、コーランジュの屋敷を守る結界に近いということで、調べに当たったのは上級神兵だった。
状況を目にするなり、神兵たちの長は、信頼する副官をすぐさま黄神神殿最高司祭であるグラスパードの元へと送った。
蒼白な顔で駆けつけた最高司祭が目にしたのは、雷の直撃を受け、すでに息絶えて

いた王太子フィオーンと、互いをかばい合うように、抱き合ったアマンシールとクランクレイアのふたりを包み込む、淡い黄金の繭だった。

そして、その繭のなかで眠る青年の指に、行方が知れなかった神宝の存在を見いだしたとき、グラスパードはしばし言葉を失い――その後、その場に居合わせたすべての神兵たちに、沈黙の誓いを立てさせたのだ。

想像し得る真相は、あまりに残酷で、万一それが広く知られた場合、何が起こるのか――経験豊富なディエーンの中枢にあっても、予想することさえできなかったがゆえに。

王太子フィオーンは、時期をずらして病死と発表され、クランクレイアは兄の死を悼むあまり体調を崩し、療養のためにロスタロイドを離れたことにされた。

アマンシールは、故郷の母を見舞うために、グランジェイドに向かう途中、不運にも賊に襲われ命を落とした――と、兄たちが最初に計画していた筋書き通りの運びとなった。

そして――次代柱神候補に上げられた残る三人は、奇しくもそれから三年のうち

に、みなが不慮の事故に巻き込まれ、命を落とすこととなった――その死に、何者かの関与を疑う者はいなかった。

いや、たとえいたとしても、その者の声が世間に広まることはなかったろう。

王家とファラスース家と神殿と――三者が協力し合って、できぬことなどないのだから。

喪失の痛みという絆で、三者は固く結ばれた。

その期間が長かったと見るか、短かったと見るかは、ひとそれぞれと言えるだろう。

エピローグ

それは、よく晴れた春の日の午後――。

ロスタロイドの中心に近い、黄神神殿の入り口に、華やかな装飾が施された馬車が止まった。

周囲に集まった人々が、どっと歓声をあげたのには理由がある。

毎月同じ日に、必ず黄神神殿に参拝するこの馬車の主は、願掛けだといって、毎回神殿だけでなく、集まった者たちにも気前よく贈り物をしてくれるのだ。

子供にはお菓子、大人には馬車の主が経営している店の商品の入った袋が配られる。

「どうせ、売れ残りだろう」

と、憎まれ口を叩く者がいないではないが、男の店がロスタロイド一の大商店であるという事実がある以上、たとえ売れ残りであろうと品の質は高く、もらってがっかりした人間はいないと評判だった。

偶然、地方から黄神神殿参拝のために出てきて、この贈り物の日に当たった農家の女主人は、もらった袋に入っていた、多少派手な色と柄ながら、肌に吸い付くような絹の肩掛けに、驚嘆の声を上げた。

「ロスタロイドって街は楽園かい!?　こんな上等なもんが、ただで貰えるだなんて！」

そうした反応に慣れっこの街の住人が、すかさずその誤解を解くべく口を開いた。

「はは。今日は特別さ。あの旦那は、毎月同じ日に神殿詣でなさるんだが、まだ願いが叶わないらしくてね、みんなに一杯ずつ酒を奢って、自分の願いが叶うよう、ついでいいからお祈りしてくれって言い出したのが始まりなんだよ。もっともその噂が広まりすぎて、入れる店がなくなったもんだから、福袋に切り替えたって話だけどね」

話を聞いた、農家の女主人は「豪気な旦那だねえ」とつぶやいた後、ちょっと心配そうに首を傾げた。

「そりゃ、こんないいものを、ただで貰えたんだもの、あたしはもちろん、心からその旦那の願いが一日でも早く叶うよう、神様にお祈りするけども……願いがかなったら、もう旦那からいいものもらえないなんて考えて、逆のこと祈ったりする不届き者が出たりしやしないかね？」

「そんな心配はいらねえさ！」

答えたのは、通りかかった別の男だった。

「旦那は、もし願いがかなったら、感謝の思いをこめて、これまでと同じこと、月一から月二に増やすって言い切ってるからね。なんでも願い事ってのは、叶えてもらう前以上に、叶えてもらった後にこそ、感謝の念を示すべきだってのが旦那の持論らしい」

その言葉に、彼女は心底感心した様子でうなずいた。

「その旦那ってひとは、本当に心から、願ってらっしゃるんだねぇ……あら、いやだ。それなのに、あたしったら配られる贈り物に気を取られて、どんなひとだか見る

こともできなかったよ」

我ながら、イヤになるねえ――自己嫌悪に顔を顰めた彼女に、なぜか周囲は暖かい言葉で応じた。

「見たいのなら、もう少し待ってればいいよ」

「そうそう。出てくれば、一目でわかるし」

「なんたって、火事親父だし」

口々に勧められ、出てくるのを待って、せめてお礼の一言でも――と思いはしたものの、「一目でわかる」だの「火事親父」だのという言葉は理解できず、件の女性は困惑してしまった。

彼女が、周囲の言葉に心から納得したのは、この約二時後のことである。

高位神官に案内されて、その男性は神殿の奥へ、奥へと進んでいく。

扉に刻まれた黄神神紋は、奥へ進むほど鮮やかな色彩となる。
最初の扉をくぐることを許されたとき、彼はまだ二十歳になってはいなかった。
その扉に刻まれた神紋は黄土色だった。
あれから、二十年——ようやく、最後の扉まで、たどりつくことができた。
扉に刻まれた神紋は、混じりけのない、純粋な黄色。
けれど、その扉には、外から開くための鍵穴が存在しない。
内側からしか開かれない扉の前で、彼はそっと目を閉じ、指で触れた。
「よう、親友」
あと二年で不惑を迎える、鮮やかな赤毛が印象的な男性は、扉の向こうで眠りつづける、かけがえのない親友に問いかけた。
「いつまで眠ってるつもりなんだ？」
と——。

「陛下からも、司祭長からも、今日は特別に時間制限なしのお許しをいただいたから、思う存分話せるぜ」

そう言って、男性――ハーリクは、期待を込めて扉を見つめたが、開く気配はなかった。

けれど、そんなことぐらいでへこたれる根性の主ではない彼は、開かない扉に背中を預ける格好で、床にぺたん、と座りこんだ。

そうして、彼は語り出す――時の流れから置き去りにされた友人に、現実のなかで起こった出来事を。

封印されたあの事件の後、平和に見えた時間は、五年とつづかなかった。

国王エスライドとファラスース侯爵リュシアンドが、相次いで亡くなったとき、一

部の者たちの間で、ガッシュマサラの関与がささやかれたが、それについての解明はなされなかった。

即位したのは、王太子となっていたケルティス――母の祖国の影響を強く受けた新国王は、時を同じくして爵位を継いだファラスース侯爵チェルギースとの折り合いが悪く、衝突することもしばしばだった。

また、権を増した王太后ウルスメイアの意向によって、エスライド以来の重臣の多くが宮廷を去ることとなった。

ガッシュマサラの属領とまで言われるようになったディエーンが、それでもぎりぎりのところで正常に機能していたのは、ひとえにチェルギースの手腕によるものだった。

しかし、彼が有能さを示せば示すだけ、国王との確執は大きくなるばかりだった。そしてついに、両者の関係は破綻したのだ。

あまりにもガッシュマサラ寄りな王に諫言したチェルギースは、その逆鱗に触れ、一切の職を解かれた上で謹慎を命じられたのである。

ファラスース一門が、王に抱いた怒りは大変なものだったが、あくまで王に従うことで、国を割らぬ選択をした当主の決定に従った。

もし、そのまま何事も起こらなければ、王家とファラスースの共存はかなったかもしれない……多少力を殺がれることで、ファラスースは逆に王家から脅威と見なされる危険から解放され、忠実で有能な臣下としてディエーンを支える存在になれたのかもしれない。

だが、事態はそうは動かなかった。

謹慎中のチェルギースが、急死したのである。

それが誰の差し金であるのか、もはや疑う者はいなかった。

ことここに至り、ついに新侯爵ファバルワースは決断した。

かつての重臣たちと手を結び、新たなる柱神がファラスース家の末子であることを公表した上で、王家に対して兵を挙げたのである。

能力においても人望においても、ファバルワースに劣るケルティスは、さらに祖父オルキン三世の死去により、後ろ盾を失いあっさりと敗北した。

かくして、ディエーンでは新たにファラスース王朝が開かれたのである。
新国王ファバルワースは、苛烈王の異名を取るとおり、旧王家の親族を徹底的に排除した。もっとも、未婚の女性に関してのみ、国王に忠実な貴族との婚姻を条件に助命したところだけは、これまでの王朝交代劇とは違っていたのだが。
そうして……ディエーンが国として安定を取り戻して、そろそろ十年になる——。

長い、長い夢を見ていた——とても悲しい夢を。
けれど、傍らには常に愛しい少女がいて、だから悲しみにも耐えられた。
最初の悲しみは、フィオーンの死。
賊に奪われることをよしとせず、自ら姿を隠した神宝『貴神の午睡』は、選んだ半身であるアマンシールが命の危機にさらされたとき、雷とともに彼のもとへ飛び込んだ……それがフィオーンの命を奪ったのだ。

その事実は、アマンシールとクランクレイアの心を凍り付かせ、それを感じ取った神宝もまた衝撃を受け、彼らごと包みこむ繭を作り上げた——心も体も、二度と何者からも傷つけられることのないようにと。

金色の繭に包まれたまま、本来なら彼らは夢も見ることなく、心の傷が完全に癒えるまで、眠りつづけるはずだった。

けれど、アマンシールはすでに、柱神への変化が始まっており、その意識は世界から無縁ではいられなかった。

夢という形で、アマンシールとクランクレイア、そして『貴神の午睡』は世界の流れを目にしつづけることとなったのだ。

大切で、大好きだったひとが亡くなった後、ふたりにとってあまり馴染みのないケルティス王子が王太子として立ったとき、形にならない漠然とした不安を覚えた。複雑な思いを隠しきれない様子の国王と、喜色満面の王妃の対照的な表情が、なおさら不安を掻き立てた。

それでも、国王とリュシアンドが健在だったころはよかった。

しかし、ふたりはほぼ、時を同じくして命を落とした。ふたりの命を縮める毒が、少しずつ盛られていくさまを、ただ見ていることしかできなかったときの苦しみは、言葉で言い尽くせるものではなかった。

そして、今度はケルティスとチェルギースの確執――。

言葉を尽くし、誠意でもって対すれば、必ずわかってもらえるはずだと、信じるチェルギースとは裏腹に、耳に痛い言葉を入れることをどんどん嫌がるようになっていったケルティスの姿に、深い悲しみと不安を覚えた。

このままでは、早晩破局が訪れることを確信しながら、けれど夢の住人でしかないふたりは現実に手を伸ばすことさえできなかった。

訪れるべくして訪れた破綻の瞬間――国王以上にファラスース一門を目の敵にしていた王太后は、完全にその息の根を止めるつもりで、謹慎下にあったチェルギースに刺客を送った。

兄の補佐に徹するファバルワースの気性が、実は兄弟中一番激しいことを見抜けなかった彼女は、己が独断こそがその命運を決したことに、最後まで気づくことが出来

なかった。

ファバルワースが心を決めたとき、すでに勝敗は決していた。

国王エスライドの時代、ディエーンを支えつづけた者たちは皆彼の味方につき、神学院在学中に培った人脈は強力な後ろ盾となった。

それでも……血は流れたけれど。

失われた命の分、アマンシールたちの心から血は流れたのだけれど……。

戦いが終息し、しばらくして人々の顔に笑顔が戻ってくると、アマンシールたちの心の傷も少しずつ塞がっていった。

人々が笑い、歌い、踊る。

そんな姿を目にするうちに、彼らの心に温もりが満ちてきた。

痛みは悲しみは、完全に消えることはないが、振り返ることができるほど、癒されることはあるのだ。

夢のなか、懐かしい友人の声が聞こえた。

『よう、親友』

まるで、その声を待っていたかのように、ふたりの意識は浮上しはじめた。
水底から溢れた気泡が、水面に向かって上っていくように――。

「……なあ」
扉に背を預けるようにして、ハーリクは語りかける。
「……兄貴さん、頑張ったと思うぜ？　確かに、内乱にはなっちまったけど、可能な限り手早く片づけてくれたおかげで、戦火もそれほど広がらなかったし、御の字じゃないか？　誰であれ、あのひと以上にうまくやれたとは思わないよ」
だから、とハーリクはつづけた。
「いいかげん、起きてこいよ……それで、やっぱり腹が立つってんなら、兄弟喧嘩してもいいじゃないか……なあ」
しかし、声は返ってこない――今日も。

小さく息をつき、ハーリクが扉に背を向けようとしたときのことだった。
ことり、と扉の向こうから、小さな音が聞こえた。
（まさか……!?）
期待と不安の入り混ざった、複雑な表情で、ハーリクはその場に立ちつくした。
息すら忘れ、凝然と扉を見つめる彼の前で、ついにそれは開かれた。
そうして、なかから現れたのは――。
最後に会ったときと、髪の毛一筋変わっていない親友と、それに寄り添う、やはり全然変わっていない紫水晶の瞳を持つ少女だった。
再会したら、絶対に言ってやるのだと、あれこれ考えていた文句のひとつも口にできぬまま、ハーリクは溢れる涙を拭いつづけた。
こすりすぎて、涙がしみるようになっても、彼は同じことを繰り返しつづけた――
夢ではないと納得できるまで。

紫水晶綺譚

ディエーンにおける王朝交代劇が終わって、そろそろ十五年を迎えるころ——。

かつて先代柱神コーランジュが住んでいた、王宮の庭でつながっている半異界の屋敷に、怒気もあらわに乗り込んできたのは、現在このディエーンを治める国王ファバルワースだった。

年のころは四十代半ば、線の細い顔立ちを気にしてか、手入れの行き届いた髭を蓄えたその顔は、あまり似合わぬところが却って周囲の警戒心を和らげるという意外な効果を発揮しているのだが、そのあたりのことは本人は気づいていない。

とはいえ、苛烈王の異名を取る彼の、そんな様子を前に動じることなく相対することができるのは、世界広しといえど、この屋敷の主だけかもしれない。

「ガネスが連れてきた娘が、ここに匿われたのはわかっているんだ。渡してもらおう」

二十歳を少し過ぎたぐらいにしか見えない青年に、ファバルワースは迫力たっぷりに要求をつきつける。

しかし青年は、柳に風といった風情で、平然と答えた。

「お断りします」
「アマンシール！」
　ファバルワースは、二十年もの眠りから覚め、柱神に生まれ変わった弟に非難の目を向けた。
「ほぼ平定したとはいえ、いまだ息をひそめている旧王家派はいると考えるべきなんだぞ!?　そんな連中に、あの娘の存在が知られたらどうなると思うんだ!?」
「兄上らしくもないことをおっしゃいますね。たとえエルスースの血を濃く引いていようと、未婚の女性に手をかける真似はなさらなかったこと、さすがは兄上だと誇らしく思っておりましたのに」
「それは直系ではなかったからだ！」
　叫んだ瞬間、ファバルワースはしまった、という顔をした。
　やはりエルスース直系の血を引く少女を巡って、五年ほど前、彼らは壮絶な兄弟喧嘩を繰り広げたのだ。
　その際、弟が持ち出した切り札は、最強最悪の代物だったため、ファバルワースは

煮え湯を飲む思いで譲歩せざるを得なかった。

柱神として目覚めたアマンシールの恋人は、旧王家の直系の血を受け継ぐ上に、隣国ルーシアルの柱神の実の娘でもあった。旧王家派が、御輿に担ぐにあたり、あまりに優れた条件を備えすぎた彼女を、ファバルワースは当然のことながら、国内に置いておきたくはなかった。

本音を言うなら生かしてもおきたくなかったのだが、友好国であるルーシアルの手前、その手段に走るわけにもいかず、彼は少女を実父の元へ送ろうとした。

しかし、外見上は昔と変わらないくせに、どういう手段を用いてか、経験だけはしっかり二十年分積み上げてきていた弟は、自らが柱神であるという強みを生かして、最強――ファバルワースにとっては最悪――の札を出してきたのだ。

恋人――クランクレイアがルーシアルへ行くのなら、自分もともに行くと、脅しでもなんでもなく、本気で言い出したのである。

国の安寧は、なにも柱神ひとりの肩にかかっているわけではない――治世者の手腕次第で、柱神の存在に拘わらず、国は豊かにも貧しくもなる。

だが、精霊の加護と、人心の安定に関して、柱神という存在が、大きな意味を持つことは否めないのだ。

以前の、ただアマンシールの兄であったころとは違い、国の統治者となったファバルワースには、口が裂けても弟に「好きにしろ」とは言えなかったのだ。

結果、クランクレイアはいまもここにいる。今、姿を見せないのは、問題の少女に付き添っているからだろう。

「……アマンシール」

「はい、兄上」

「よもやまさかとは思うが、何度も何度も何度も、同じ手が使えるなどとは思っていないだろうな？」

たっぷりと威嚇をきかせた言葉に、しかし長い眠りのなかに、可愛げというものを置き忘れてきたとしか思えない弟は、飄々とした顔で応じた。

「さて……使えるものなら何度だって使いますが。まあ、今回は、そこまでするつもりはありませんよ。兄上だって、あの子が旧王家派の残党に担ぎ上げられる危険さえ

なければ、命まで取ろうとは思っておいでじゃないんでしょう？」

それはその通りだったが、なぜだろう――ファバルワースは面白くなかった。

その理由は、問題の娘の素性にあった。

「……あれは、ケルティスの娘だぞ」

ファバルワースが手を下した、エルスース王朝最後の王の――。

「兄上の仰ることとも思えない……ケルティス王は、自らの失政を、すでに命をもって償われたではありませんか。それでは足りぬと……その分の、顔も知らない父の罪を、あの娘に負わせるおつもりですか？」

口調に変化はなかったが、声に宿る微妙な響きが変わった。

それが、アマンシールが本気で怒りかけている兆しだと、気づいたファバルワースは不本意ながらいったん引くしかなかった。

普通に接している分には――いつの間にか経験値を積んだだけ、扱いには注意を要するようになったのは確かだが――以前とあまり変わりないように思える弟だが、本気で怒らせた場合、放たれる怒気の凄まじさは言葉に尽くしがたいものがあること

を、ファバルワースは身を以て知っていた。
弟は確かに、神の眷族なのだ。
「……わかった。あの娘はお前にまかせよう……だが、万一にも、あの娘のことが外に知れたら……その時は、こちらの判断に従ってもらうぞ。ようやく安定したこの国を、再びふたつに割る危険は、王として冒せないからな」
その言葉に、アマンシールは「はい」とうなずいた。
殊勝な態度に見えるが、それだけではないと感じるのは、なにも自分の気のせいではあるまいとファバルワースは苦々しく思った。
（昔はあんなに可愛かったのに……）
全然可愛くない性格に育ってしまった弟に、彼は恨めしげな目を向けた……。

「……わたし……」

エルスカーネ侯爵ガネスシードに伴われ、夜半こっそりとこの屋敷に連れて来られた少女アランヴィータは、不安を隠せない様子で、五歳違いの叔母――正確には違うらしいのだが――を見上げた。

ディエーンを守護する柱神を人生の伴侶に持つこの女性は、五年前に目覚める以前、二十年もの間時の流れから離れた場所で眠りつづけていたのだという。現在十九歳の彼女は、アランヴィータと同じ黒髪と紫の瞳の持ち主で、確かに近い血のつながりは感じるけれど、『叔母』と呼ぶには若すぎて、だからまだ、呼びかける度にとまどってしまう。

「クランでいいと言っただろう？　わたしも、アランみたいに大きな子を、姪とか……正確には従兄の娘なんだけど、そういう感じに思うのは難しいし、妹みたいに思ってるんだ。アランもそうしてくれると嬉しいな」

淑女というには、いささか風変わりな話し言葉に、最初こそ驚かされたが、慣れてしまうと却って楽に感じられるのは、ずっと家族だと信じていたエルスカーネ侯爵やその息子の話し言葉に近いからかもしれない。

「はい、クランさま。でも……あの、わたし本当に、ここにいていいんでしょうか。ご迷惑をおかけするんじゃ……」

言いかけて、けれどどこにも行く当てがない彼女の声はどんどん小さくなっていく。

ほんの先日まで、アランヴィータは自分が体が弱く生まれついたせいで、家族と離れ、田舎で療養生活を送っているのだと信じ込んでいた。その割には滅多に風邪ひとつひかなかったのだが、そのことを尋ねると周囲は皆「おとなしくしてらっしゃるからこそ、病魔を呼び込まずにすんでいるのです」と口を揃えて言った。

だから、外出などもってのほか、散歩さえ、屋敷の奥まった庭の一部しか許されなかった。いまにして思えば、あれは自分の姿を近隣の住人から隠すための方便だったのだろう。まさか自分が、打ち倒された前王家の、それも最後の国王の落とし胤だとは知らなかったから、たまに訪れる、父や兄だと信じていたガネスシードやアスクライムに、外を見たいと言っては困らせたものだ。

あの日、顔を強ばらせたガネスシードに、ここに連れて来られる途中で事情を説明

されるまで、自分という存在が、いかに危険で厄介なものなのか、彼女は想像したこともなかったのだ。

「迷惑だなんて、わたしもジェスも思ってないんだから、妙な気を回すんじゃない。エルスースの血を引いてるという点では、わたしも同じなんだし」

「でも、クランさまは当代さまの奥様ですし……」

自分とは違う――と言いかけたアランヴィータは、なぜか顔を赤らめたクランクレイアの様子に気づき、首をかしげた。

「あの、わたし、なにか変なことを言いましたか？」

尋ねた彼女の前で、クランクレイアは「いや、べつに」と慌てた様子でかぶりをふった。

「……ともかく！　アランはわたしの妹のようなものなんだから、変な遠慮はしないこと！　あと、ここなら精霊たちが守ってくれているから、散歩でも木登りでも、好きなだけできるから、一緒に遊ぼうな」

瑕瑾ひとつない美女の口から、散歩はともかく「木登り」などという言葉が飛び出

したことに驚きながらも、未知への好奇心で、アランヴィータは瞳を輝かせた。
「木登りって、本で読んだことしかありませんでした。本当に遠くが見通せるんですか？」
「うーん……屋敷の周りはほとんど森だから、遠くを見渡すというわけには……そうだ！」
何事か思いついたらしいクランクレイアの紫の双眸が、きらりと輝いた。
と、ほぼ同時に「わたしも一緒の時でなければ、空の散歩は許可できませんよ」と、別の声が扉のほうから聞こえてきた。
「え」
慌てて振り返ると、当代柱神アマンシールが入ってきたところだった。
「ジェス！」
顔を輝かせ、立ち上がったクランクレイアとは逆に、突然のことに、アランヴィータは慌てふためいてしまった。
「あ、あ……ご無礼を……っっ！」

教えてもらいこそしたものの、やったことはない最高の敬意を表す礼を取ろうとした彼女に、気さくな笑顔で、アマンシールは「いい、いい」と手を振った。

「陛下はお帰りになったのか？」

クランクレイアの問いに、ここ五年の間に、どんどん色が濃くなったという、暗褐色の髪をさらりとかき上げ、神の一員となった青年はうなずいた。

「ああ、ちゃんとわかって戴けたようだよ。彼女の元気な姿を確認するために、月に二度使いを送って来られるそうだ。せっかくだから、エルスカーネ家のアスクライムを指名しておいたよ。アランとは、仲が良いって聞いてたからね」

思いがけない名前を聞いて、アランヴィータはぽかんと口を開けた。

兄とも慕うアスクライムは、彼女にとって特別なひとだった。けれど、自分が何者なのかを知って、ここに連れられてきた以上、多分二度と会えないだろうと諦めていた。

なのに――。

「……本当、ですか？」

震える声で尋ねた彼女に、アマンシールは「もちろんだ」とうなずいた。
「……とは言っても、一緒にお邪魔虫が一匹ぐらいくっついてくるだろうけど、まあ、そっちはこちらで引き受けられるだろう」
だから、なにも心配はいらないのだと――言葉ではなく眼差しで告げられたような気がして、アランヴィータは胸が熱くなった。

「……保護された後で、その女性が身ごもっていることがわかったんだって？」
アランヴィータが眠りについたのを確認してから、アマンシールの部屋を訪れたクランクレイアは、まだ聞いていない詳しい事情を聞き出すために口を開いた。
「……うん、そうらしい」
うなずきながら、アマンシールは棚からあまり強くない、口当たりのやさしい果実酒を杯にそそぐと、彼女に差し出し、アランヴィータを連れてきたエルスカーネ侯

爵から聞いた話を説明し始めた。

ケルティスが敗北した後、玉座についたファバルワースがまずやったことは、後宮の女性たちを信用のおける臣下に預け、懐妊の兆しがないか、徹底的に調べることだったのだという。

事実、後宮には臨月にさしかかった側室がおり、彼女は出産まで、厳重な警備の下保護されたが、残念ながら生まれた子供が産声を上げることはなかった。

ところが、ほかにもひとり、小さな命を宿していた女性がいたのだ。

ファバルワースの親しい友人のひとりでもあったエルスカーネ将軍は、悩んだ結果、その女性の体調不良を理由に、地方の屋敷に隔離したのだという。生まれ落ちた子供が男児であったなら、さすがに彼もその命を見逃すことは出来なかったことだろう。だが、生まれたのは女児だった。

旧王家の最後の王の血を引く娘――微妙すぎる立場に生まれたその子供を、ガネスシードは結局、出自を知らせることなく、隠し育てることにしたのだ。

「兄上の友人らしいなあって、聞いた時思ったよ。あのひとは、自分が時に過激に走

りすぎることを知ってるものだから、歯止めになってくれるような、良識持った頑固者にばかり近づきたがるとこがあって……一番上のチェルギース兄上も、まさにそういうひとだったしね」

「……ジェスも、いまでは立派に歯止めになれてると思うけど？」

クランクレイアの言葉に、一瞬面食らったように目を瞠ったアマンシールは、一拍おいて、「だったら嬉しいかも」と答えた。

「ただ、あの子のことは、本当に気をつけて上げたいね。兄上としては不本意だろうけど、もし心を通じ合えるひとと巡り会えたら、そのときはなんとかしてもあげたいし……」

言って、アマンシールは考えこんだ。

「ぎりぎりまで、兄上の説得には力を貸すつもりだけど……んー、最後の手段として、相手の覚悟次第では、ルーシアルのお方を頼って、駆け落ちさせるって手も……」

などなどと、いまだ全然気配もない心配ごとに頭を悩ませていたアマンシールは、

ためらいがちに掛けられた声に顔を上げた。

「なに？」

問いかけた彼と、テーブルを挟んだ正面に座っていたクランクレイアは、「いや、その」と口ごもりながら、うつむいた。

その顔が、心なしか赤くなっていることに、アマンシールはもちろん気づいたけれど、その理由まで読み取ることはできなかった。

「あ、あの……アランが……わたしのこと、お前の奥様だって……言ったんだ」

「あ、ああ」

つられて顔が赤くなるのを感じながら、アマンシールはうなずいた。

柱神として、目覚めてから五年……ずっとクランクレイアとふたりで暮らしているのだから、そう見なされることは、すでに慣れっこにはなっているのだが……それでも、当事者同士の間では、気恥ずかしい話題だった。

理由は……その、ひとつだけれど。

「それで、あの……その、だな」

恥ずかしそうにそこまで言って、クランクレイアは杯に満たされた果実酒を一気に干すと、勢いよく立ち上がって叫んだ。

「わ、わたしはっっ！　まだ、ジェスの奥さんにしてもらえないのか!?」

大変な勇気を要したであろう一言を口にしたクランクレイアの顔は、見る間に真っ赤に染まった。

そんな彼女を見つめながら、アマンシールは彼女に先に言わせたことを反省しながら、そっと立ち上がり、彼女の隣に立った。

恥ずかしそうに、うつむくクランクレイアの頬にやさしく指で触れ、彼は彼女にささやきかける。

「……ごめん。わたしが言わなければならないことだったのに……クラン」

目覚めて以来、本人に望まれたこともあって、「さま」付けはなくなっていた。

「わたしの、奥さんになってくれますか？」

クランクレイアはうつむいたまま、顔を上げようとはしなかった。

けれど震える唇が紡いだ小さな小さなつぶやきが、問いに対する答えとなった。

「……はい」

と、答えたその声が。

アランヴィータが屋敷に来て、三度目の春が訪れたころ、屋敷の主人は彼女と、その相愛の青年から重大な相談を持ちかけられた。

「結婚？」

問いかけたアマンシールに、正面に座るふたり――アランヴィータとエルスカーネ家の長子アスクライムは、緊張を隠せない様子で「はい」とうなずいた。

「アランの保護者としてなら、本人たちが本気なら、反対するつもりはないけれど……アスクライムのご家族の方はなんとおっしゃってるんだい？」

聞くまでもないことだったが、一応これは聞いておかなければなるまいと、尋ねたところ、案の定、青年はますます体を固くした。

（……まあ、それはそうだろうけど……）

アランヴィータはほかの、前王家縁の女性たちとは違う――嫡出子でこそないが、いまとなっては唯一の、ケルティス王の忘れ形見だ。

ファバルワースは、正直なところ、命の穂を刈ってしまいたいところだろうが、アマンシールの手前、沈黙を守っている。そんな王の心中を、誰より知っているだろうエルスカーネ侯爵としては、到底許せる話ではないだろう。

「……それで？　わたしが許したら、ついでに頑固者の説得も頼んでしまおうってつもりなのかな？」

少しばかり意地悪な気分で、アマンシールはアスクライムに問いかけた。

一緒に暮らしている内に、クランクレイア同様、彼もアランヴィータのことは妹同然に愛しく思うようになっていたものだから、奪っていく男に、完全に好意的にはなれないのだ。

しみじみ、フィオーンは心が広かったのだと思い知らされる。

（目に入れても痛くないほど、クランのことを溺愛してたのに、わざわざわたしの背

中を押したりしてくれたんだもんなぁ……絶対したくなんかなかったろうに……）

彼との思い出は、圧倒的にやさしいものが多かったので、アマンシールもクランクレイアも、彼のことは大好きなままだ。

目覚めてしばらくは、思い出す度、胸に痛みが走ったものだけれど、いまではそれも消え失せた。愛していたこと、そして愛されていたことを、心から信じられるから、きっと死ぬまで彼のことは大好きでいられるだろう。

一方、いじめられた格好になったアスクライムは、「あ、いえ」と意味不明の言葉を口にした後、覚悟を決めた様子で顔を上げた。

「はい、その通りです。家族ひとり説得できない無能な男だと軽蔑されてもかまいません。当代さまには、それでも父に話をしていただきたいのです」

面子にこだわらないアスクライムの態度に、アマンシールは内心彼の評価に加点した。

自分にできることとできないことを把握した上で、他者に頼み事をするのは、存外勇気がいることなのだ。しかも、彼は甘えきった性根でアマンシールを頼ろうとして

いるのではない。それがわかるから、彼の口元には笑みが浮かぶのだ。
「あの一徹なひとを説得できないからって、一概に無能だとは思わないけどね……ひとつだけ、聞いておきたいんだけれど、どうしても許してもらえなかった場合、どうするつもりでいるんだい？」
「そんな……っっ！」
と、アランヴィータは絶望に瞳を翳らせ、
「それは……」
と言いかけ、アスクライムは言葉を飲み込んだ。
若い恋人同士に——いや、アマンシールだとて、眠っていた二十年を差し引けば、まだまだ世間的には若造と呼ばれる年齢だったのだけれど——救いの手を差し伸べたのは、またしても空の散歩に出かけていたらしいクランクレイアだった。
籠一杯の野いちごを手に、部屋に入ってきた黒髪の美女は、軽くアマンシールをねめつけた。
「なにを意地悪を言ってるんだ？　可愛いアランを取られそうだからって、アスクラ

イムをいじめるんじゃない。兄上はそんなことはなさらなかったぞ？」

（いや、きみが知らないだけで、実はそれなりにいじめられてはいたんだけど……）

とは思ったものの、この心理はきっと男でなければわからないだろうとの判断で、口には出さなかった。

「クラン姉さま」

彼女の登場に、明らかにほっとした様子で、アランヴィータが声をあげる。

昔から、妹がほしかったらしいクランクレイアは、完全にアランヴィータの味方なのだ。

「……別にいじめていたわけじゃないよ。覚悟のほどを聞いておきたかっただけで……もっとも、軽はずみに駆け落ちするだなんて答えるようなら、アランに恨まれても、断固として反対するつもりだったけどね」

「自分だって、わたしを誘ったくせに？」

皮肉げに切り返されたが、アマンシールは動じない。

「あのときは、逃げないと命が危なかった……このふたりの場合、逃げたほうが命の

危険にさらされる。全然、話が違うよ」

ファバルワースは、アランヴィータをアマンシールの監督下に置くことで、その命を許したのだ――彼女が外に出たら、その約束はなかったことになる。

「でも、まあ……手はなくもないと思うよ」

いじめるのもほどほどにしないと、可愛い妹分に本当に嫌われてしまうと判断したアマンシールは、最愛の妻をこれ以上怒らせないためにも、切り札をだすことにした。

彼が選んだ説得相手は、頑固一徹な侯爵ではなく、似合わない髭を一所懸命整える、玉座の主だった。

薄情な弟は、妻や可愛い妹分を悲しませるぐらいならと、心労の多い兄の白髪を増やす方を、あっさりと選んだのである。

「どうしてお前はっっ！　そう、無理難題ばかりをわたしに押しつけるんだ!?」

半月後、血相を変えて怒鳴り込んできた兄を、アマンシールは笑顔で出迎えた。

「なんのことでしょう？　わたしは関係者一同、皆が幸福になれる提案をしただけですが？」

「幸福なのは、当事者ふたりだけだ！　危険な火種をまくような真似はやめろ！　何度も言っただろうが！　あの娘は、ほかの助けてやった娘たちとは違うと！　しかも、あれほどエルスースの特長を色濃く持っているんだぞ!?　どんな噂が立つかぐらい、わからないお前じゃないだろう！」

兄の言葉はいちいちもっともだとわかってはいたが、見えているのに何一つ手出しができないもどかしさを、二十年も強いられた結果、とんでもなく精神的強度を鍛え上げられたアマンシールは、正論だからといって引き下がるような殊勝さも、臨機応変に取り出し自由にできる特技を身につけていた。

「ええ。わかってます。だから、これに関してだけは、義姉上のご協力が必要だと思いご相談したわけですが……先日、色よいご返事をいただけましたので、遠慮なく噂

を流させていただきました」

不穏なものを感じ取ったのか、それまで激高していたファバルワースがぴくり、と眉宇を震わせた。

「……噂、だと……？」

「はい」

このときの、アマンシールの満面の笑みは、ファバルワースに安堵ではなく危機感を覚えさせるものでしかなかった。

聞くのは正直恐ろしかったが、聞かないでいるのはもっと恐ろしく、ファバルワースはここ久しく感じたことのない緊張を胸に、決死の覚悟で口を開いた。

「どんな、だ？」

対するアマンシールは、相変わらずの笑顔で、こともなげにとんでもない答えを返してくれた。

「十日ほど前、相談に見えた黄神神殿の神官のひとりが、偶然見かけたらしいアランヴィータのことを尋ねてきたものだから、ちょっとした事情があって、数年前に引き

取った姪っ子です、と答えただけですよ」

アマンシールの妻であるクランクレイアの存在は、神殿関係者のごくごく一部にしか知らされていない極秘事項だ。

そんな彼らであれば、アランヴィータの姿を目にしたところで、即座に事情を察し、沈黙を守るだろうが……お付きとしてついてきただけの、事情を知らない神官が、先のアマンシールの言葉を耳にした場合、なにを思うのか……。

「マルシアス家を除けば、ディエーンの名門貴族はみんなそれなり以上に近しい親戚関係にありますし、亡くなった伯母上も、黒に近い褐色の髪に、紫の瞳をお持ちでしたからねえ……」

ファラスースの一族に、黒髪紫瞳の子供が生まれても、おかしくはないのだ。

「お前はまさか、あの娘をわたしの隠し子だという噂を流したのか!?」

「そんな……兄の名誉を傷つけるようなこと、わたしが口にするわけがないじゃありませんか」

一応否定するものの、はっきりと明言しないことで、相手が勝手に誤解するよう話

の流れを操作した線が濃厚だ、とファバルワースは思った。
なにより、先ほど彼が口にした「義姉上の協力」だとか「色よいお返事」という言葉の意味を考えると……不本意ながら答えは見えてしまう。
「后まで巻きこんで……お前は、あの娘ひとりのために、少なくはない人間に、嘘を強いるつもりなのか!?」
このときのこの台詞は、国王ファバルワースとしてではない、アマンシールの兄ファバルワースとしてのものだったのかもしれない。
しかし、このとき彼の正面にいたのは、すでに神の眷族に加えられた存在だった。
「嘘のひとつやふたつや三つや四つ、なんだというんです。そんなもので、命がひとつ、つみ取られずにすむのなら、安いものじゃありませんか」
命が失われていくさまを、為す術もなく見守ることしかできずにいた二十年という時間は、アマンシールの心に否応なく変化を強いていた。
「……詐術に長けた柱神なんて、聞いたこともないし、誰も喜びやしないぞ」
限りなく負け惜しみに近い捨て台詞を口にしたファバルワースに、少しだけ傷つい

た顔で、アマンシールはこう返した。

「なら、これ以降、そっち方面は、兄上にお任せします」

ファバルワースはそれ以上、何かを口にする前に、王宮に戻っていった。

アマンシールの、完全勝利だった。

人間万事塞翁が馬――とは言うものの、結果的にある個人に都合のいい結果がもたらされた場合、そこには思惑とそれなり以上の努力が存在するのではないか、というのが、二十年もの眠りであれこれ学習させられたアマンシールの主張だったわけだが、これが肯定されるのと否定される例が、立て続けに起こったことで、彼は困惑した。

旧王家縁の女性と、現国王ファバルワースの間に生まれたらしい、公には認められない少女とエルスカーネ家の長子との婚姻は、前もって流された噂と、少女の後見に

当代柱神アマンシールが立ったことで、好意的に世間に受け容れられた。

唯一の問題は、その晴れがましい席に、花嫁が実の姉とも慕うクランクレイアが出席することがかなわないことだったが、このときクランクレイアが本当に体調を崩していたため、アランヴィータも泣く泣く諦めた。

その、彼女の体調不良の原因が、懐妊によるものだと判明したとき、アマンシールとアランヴィータは手を取り合って喜んだのだが、医師から告げられた説明を聞く内に、ふたりとも今度は顔色を失っていった。

柱神という、ひととは違う存在の子を宿すことが、クランクレイアの肉体に相当の負担を強いていると医師から聞かされた瞬間、アマンシールは妻の命をこそ優先してほしいと医師に訴えた。

けれど、そんな彼の選択を、ほかの誰でもないクランクレイア自身が拒絶したのだ。

夫婦間の争いは、熾烈を極めた。

「クラン！」

「駄目だったら駄目だ！」

「きみはわたしから、きみという光を奪うつもりなのか⁉」

それは、最低で最高の愛の告白だった。

「……クラン。わたしのことを、自分の子供より妻を優先する最低な男だと見下して軽蔑してくれてもいい……かまわない。でもそれでもわたしは……」

思い出す限り、人生最悪の恥露呈劇場だったかもしれない。

けれども、そこまで訴えた彼に対して、クランクレイアは泣きそうな顔をして、どうしても頷けないのだと主張した。

「ここに……」

いまだ、膨らみのかけらもない自らの腹部に両手を当て、彼女は訴えた。

「命が、あるんだ。もう、宿ってるんだ」

そう言って、彼女は縋るような目を、アマンシールに向けた。

「これが、わたしの我が儘だってことはわかってる。自己満足に過ぎないかもしれないってことも……でも、わたしは、最後までジェスのそばにはいてあげられないから

……ジェスに最後までつきあえる、ジェスとわたしの分身を残したい。そう願ったわたしに、この命が宿ってくれたのは偶然とは思えない……ジェス、ジェス。お願いだから、この命をつみ取るような真似だけはしないでくれ……」

なんとひどいことをいう女なのかと――初めてクランクレイアのことを呪わしく思った。

ずっと一緒にいられないことなど、運命の扉が開かれた時点でわかりきっていた。それでも、可能な限りともにありたいと願って……祈って。

それだけでいいと、それで充分だと、思う男の浅はかさを――。

なんと的確に彼女たちは見抜き、裏をかいてくれるのだろう。

「約束、する」

本当に言いたい言葉を封印するため、アマンシールは両手を固く握りしめた。

なにより、クランクレイア自身が望んだことだったから――アマンシールは全てを見守る覚悟で、そのときを、待った。

長い、長い時が流れた。

結局のところ、クランクレイアの選択が正しかったのだと、アマンシールとしては思わざるを得ない。

クランクレイアさえいれば、それだけでいい——そう思っていたのは大きな誤りだった。きっと、彼女は自分より先に、そのことに気づいて、だからあの選択をなしたのだ。

出産を終えたクランクレイアは、医師が懸念していた通り、ひどく衰弱していた。

クランクレイアか、生まれた子供か——アマンシールが残酷な選択にさらされずにすんだのは、駆けつけてきてくれたアランヴィータのおかげだった。

クランクレイアの様子を一目見るなり、彼女はともに駆けつけた夫より先に、「この子のことはわたしが、責任をもって引き受けますから！」と叫んだのだ。

ほかの誰が同じ言葉を口にしても、あのとき——クランクレイアを安堵させること

はできなかっただろう。

けれど、あのとき駆けつけたのはアランヴィータで、叫んだのもアランヴィータだったから……あれこそが、神の配剤だったのかもしれない。

結局、クランクレイアが健康を取り戻すことはなかった。

置き去りにされることは覚悟していたものの、それはもっと先のことのはずだという思いが、アマンシールの目を塞いでいたのかもしれない。

あっけなく、クランクレイアの命は自分のそばから駆け去ってしまった。

彼女を失った痛みに打ちのめされたとき、そばで支えてくれたのは、アランヴィータとアスクライムのふたりだった。

クランクレイアを失い、殆ど抜け殻状態に陥ったアマンシールに、彼らは辛抱強く話しかけ、また引き取った子供のことを語りかけることで、彼の意識を現世に引き戻してくれたのだ。

今では、もう、なにもかもが遠く感じられるほど、心は時にさらされてしまったけれど。

それでも、決して忘れない目印を、妻と妹が残してくれたから、アマンシールは世界を愛しつづけていける。

黒髪と、紫水晶（むらさきすいしょう）の瞳――。

それは彼の中にあって、最高の祝福を与えるべき存在だった。

ガスカールという名の青年公爵が、真実彼の血を受け継いでいるという事実を、アマンシールは明らかにするつもりはない。

けれど、意図せぬなにごとかが、真実を暴き出すかもしれないことを、彼は確かに感じ取っていた……。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

この度は『天を支える者　古戀唄（いにしえこいうた）』の第五巻をお手に取っていただき、ありがとうございます。

四巻のあとがきで宣言しました通り、なんとか完結にこぎつけることができました。

しかし、ストーリーの展開上、アマンシールとクランクレイアが生身で会えないのには苦労させられました。三巻で両思いになったはずなのに、ちっともふたりのラブラブモードが書けない！　それどころか、ふたりっきりのシーンでも、片方透けちゃってるし（死にかけてる訳じゃないことぐらいしか救いがない……）。

本当にこのふたりは、世間並みの恋人同士になれるのかと、書いてる最中、ずっと心配していたら、本当に普通とは言い難い恋模様となってしまいました。

乙女の心を忘れたくない私としては、ヒロインの危機に颯爽と登場するヒーローという、普遍の黄金律は、是非とも死守したいところなのですが……今回すでに守れなかったかも。ヒーローの危機に、ヒロインが飛びこんじゃったし。アマンシールくんは決してヘタレじゃないと思うので……これは、クランクレイアが男前過ぎたということでしょうか……。うーぬぬぬ。

ふたりとも、許して……（泣）。

さて、同時収録されている短編『紫水晶綺譚』は、『古戀唄』の後日談です。

古戀唄では振り回されっぱなしだったアマンシールくんも、数奇な巡り合わせで積んだ人生経験がものを言ったのか、逆にお兄さん其の二（兄弟中一番のくせ者という設定だったはずなのに……うーむ）を振り回す強者に成長（？）してくれました。

でも、絶対女性陣には勝てないあたりが……なんだかどんどん、私の作品では女性陣強者化現象が進んでいるような気がします。

そんななかで、アランヴィータはまっとう……もとい、正当派のお嬢さんとして描けた数少ない（情けなや）ヒロインだと思ってます。

複雑な出生に、兄とも慕う幼なじみとの恋――って、ほとんどクランクレイアと同じ……？　なのに、どうしてこんなに違うのか。やはり空飛ぶ特技と、大胆な行動力が二人を分けたのでしょうか。

余談ですが、アランヴィータが嫁いだエルスカーネ家が、公爵家になるのは、彼女の夫が当主についた後のことです。だから、作中では侯爵家、なのですね。勘違いでも忘れてるわけでもありません……念のため。

無事完結できたことだし、予告していた裏事実あれこれも、とりこぼすことなく書けましたし、ご意見ご感想、是非お寄せ下さい。

あと、この本が店頭に並ぶころ、発売中の雑誌Ｃｏｂａｌｔの八月号と、九月発売の十月号に、『天を支える者』本編のヒロインであるナルレイシアが登場する番外編『嵐と共に』が前後編で掲載されます。

アマンシールとクランクレイアの時代から、二世紀後のディエーンを舞台に繰り広

げられる話ですが、一部の長生き人種（神種？）が、ひょっこり顔を出さないとも限りませんので、こちらも読んでいただけたら幸いです。

でもって、そちらの原稿が終わったら、いよいよ続きっぱなしのあの話やらこの話やらその話にも着手しなくては――と思っております。

最後になりましたが、今回この本を出すにあたって、尽力（じんりょく）してくださった関係各所の方々に、心からの感謝を捧げさせていただきたいと思います。

今回ばかりは、その方々のお力がなければ、絶対に店頭に並ぶことはあり得ないと確信できるほど、ご迷惑をおかけしてしまいました。

二度とこのようなことのないよう、しっかり肝（きも）に銘（めい）じたいと思います。

明咲（あさき）トウルさま。『古戀唄』完結記念のコメント、本当にありがとうございました。作品中では見ることのかなわない、成長した某三人勢揃いのイラスト、可愛いやら切ないやら、涙が出そうになりました……これからもよろしくお願いします。

そして、ここまで読んでくださった方々――。

少しでも、なにかを感じていただけたら、これ以上のことはありません。

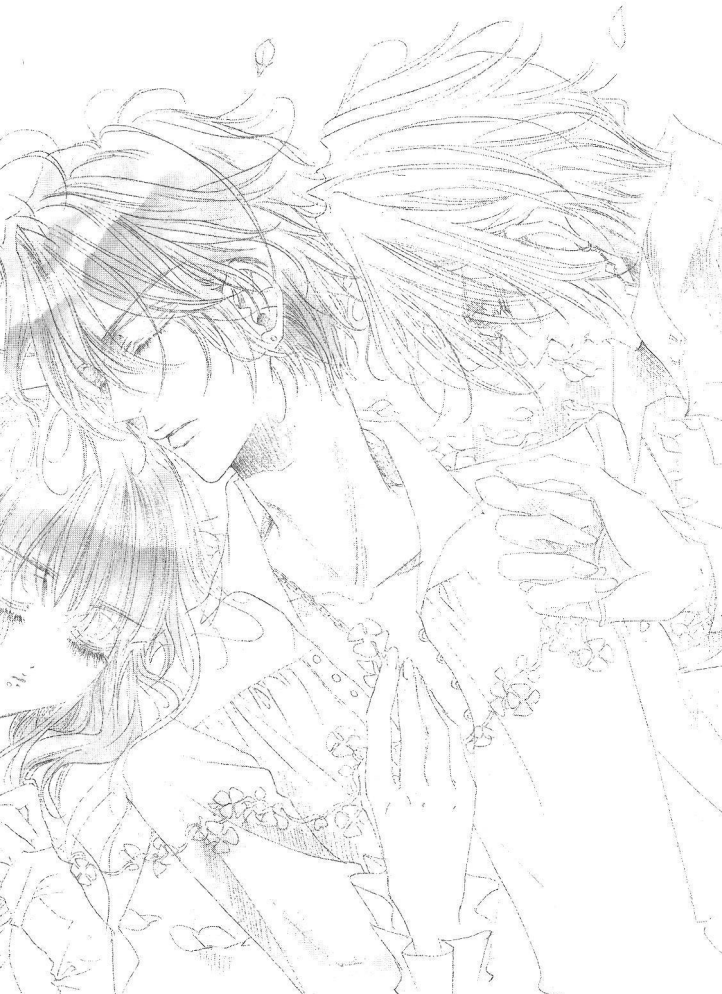
それでは、また次の作品で、なるべく早くに再会できることを、心から祈りながら
――筆を置かせていただきます。

平成十八年　梅雨の最中

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

アマミール＋フォーニ＋クラン。



もし争いが起こらなければ、この3人はきっと大人になっても
庭でお茶をしながらイイ仲良く過ごしていたのだと思います。
カナトハシャお菓子や、くだらないような会話を楽しみながら…

残酷でもあり、その実幸福の可能性も秘めた世の流れは
次世代の子供達であるナルレインアやガスカールスカルトード達に
引き継がれていくのでしょう。
彼らの誰もが幸せになれる事を祈っております

明咲トウル
2007

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10

集英社コバルト編集部　気付

前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
古戀唄 5

COBALT-SERIES

2006年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　片山道雄
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2006　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600799-1 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者2

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）2

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）3

天を支える者 古懇唄（いにしえこいうた）4



〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

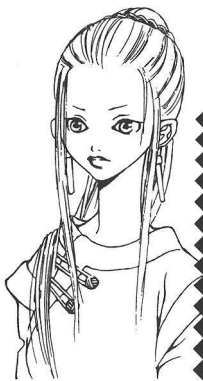
聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚 碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚 月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



- 漆黒の魔性
- 白焔の罠
- 柘榴の影
- 紫紺の糸（前編）（後編）
- 翡翠の夢1～5
- 鬱金の暁闇1～3
- 女妖の街 破妖の剣外伝①
- ささやきの行方 破妖の剣外伝②
- 忘れえぬ夏 破妖の剣外伝③
- 時の螺旋 破妖の剣外伝④
- 魂が、引きよせる 破妖の剣外伝⑤
- 呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣外伝⑥

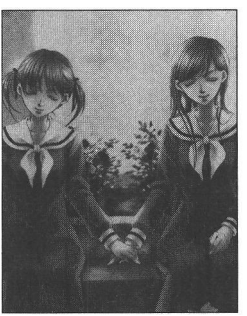
〈好評発売中〉 コバルト文庫

マリア様の魅力いっぱいのイラスト文庫!

マリア様がみてる
イラストコレクション

今野緒雪
ひびき玲音
イラスト／ひびき玲音

文庫の表紙や秘蔵のカットなどイラストを一挙大公開。書き下ろし小説も収録した内容盛りだくさんの豪華本！



〈マリア様がみてる〉シリーズ・好評既刊

マリア様がみてる
黄薔薇革命
いばらの森
ロサ・カニーナ
ウァレンティーヌスの贈り物(前編)(後編)
いとしき歳月(前編)(後編)
チェリーブロッサム
レイニーブルー
パラソルをさして
子羊たちの休暇
真夏の一ページ
涼風さつさつ
レディ、GO！
バラエティギフト
チャオ ソレッラ!
プレミアムブック
特別でないただの一日
イン ライブラリー
妹オーディション
薔薇のミルフィーユ
未来の白地図
くもりガラスの向こう側
仮面のアクトレス

〈好評発売中〉 コバルト文庫

願いのたどりつく先は…。完結編！

緑のアルダ

第二部～守龍編～　龍の歌

榎木洋子
イラスト／唯月　一



魔法使いラダにより囚われの身となったアルダ・ココ。彼に連れられ、隻眼の女神が住まう土地へと…。壮大な守龍探しの旅の結末は!

緑のアルダ シリーズ・好評既刊

石占の娘
荒れ野の星
千年の隠者
謀略の都
虹の白夜
旅立ちの丘
蒼い雪原
熱砂の宮殿
水あふるる都
龍の島
（第二部～守龍編～）
導きの泉
緋のウルファ 白のラダ
占い師の宿命

〈好評発売中〉 コバルト文庫

真の聖獣王は、まだ決まっていない。

聖獣王の花嫁（クロスティア）

剣を継ぐ姫

高遠砂夜

イラスト／起家一子



妹姫の身代わりでゼネスティアへ嫁いだリージュ。王位争いに勝った王子・イオの花嫁になるはずが謎の少年に城から連れ出され!?

〈聖獣王の花嫁〉シリーズ・好評既刊

聖獣王の花嫁（クロスティア）

〈好評発売中〉 コバルト文庫

偉大なる女王の、残酷な運命――。

流血女神伝

喪の女王4

須賀しのぶ
イラスト／船戸明里



修道女として身を隠していたカリエは、突然女王バンディーカと対面。その存在感に圧倒されつつ、やがてある違和感を覚えはじめ…。

〈流血女神伝〉シリーズ・好評既刊

帝国の娘(前編)(後編)
暗き神の鎖(前編)(中編)(後編)
砂の覇王1～9
喪の女王1～3
女神の花嫁(前編)(中編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

戦国絵巻、ついに完結!!

姫神さまに願いを

～久遠の夢の涯～

藤原眞莉

イラスト／鳴海ゆき

家康が天魔王・信長を討つ覚悟を決めたと知り、テンとカイは浜松城へ向かう。二人の婚姻に必要な呪物はあとひとつ。恋の結末は!?



〈姫神さまに願いを〉シリーズ・好評既刊

姫神さまに願いを
～享楽の宴～
～浪の下の都～
～永遠国ゆく日～
～鏡語りの森～
～夢路の剣～
～巡恋夏城～
～血誓の毒～
～月の碧き燿夜～ 前編
～月の碧き燿夜～ 後編
～秘恋夏娘～
～殉血の枷～
～遠国散る恋華～ 前編
～遠国散る恋華～ 後編
～荊いだく蝶～
～空参鳥の幻～
～空葬の瞳～
～雪去りの紅～
～藍ちぎる瑠璃～
～緋承ぎの形代～
～摘みし緋の扉～
～虚白の磐座～
～夢者の孤国～
～様々果恋草子～
～形見の夢標～

〈好評発売中〉 コバルト文庫

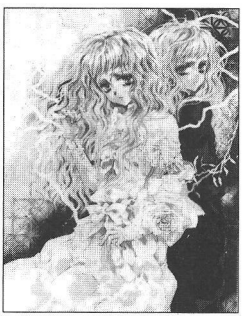
神よ、彼らに光を――。

ガイユの書

薔薇の灰は雪に

響野夏菜

イラスト／凱王安也子



〈灰(ドゥ)かぶり(ー)〉ポーシアとルーがたどりついたのはザイクルーヴ城。一方、マイは〈天人(セレス)〉から驚愕の真実を知る。さまよう愛の結末は…。

〈ガイユの書〉シリーズ・好評既刊

ガイユの書 薔薇の灰に祈りを

ガイユの書 薔薇の灰に恋(こ)がれ

ガイユの書 薔薇の灰は闇に

〈好評発売中〉 コバルト文庫

俺は何度でもお前に恋をする…！
～リアランの竜騎士と少年王～
覇王の竜剣

花衣沙久羅
イラスト／小島　榊



ヴァイク・ルー王子の前にローマで処刑されたはずの恋人、ヨシュアが現れた。再会を喜ぶのも束の間、彼は記憶喪失になっていて…。

――〈～リアランの竜騎士と少年王～〉シリーズ・好評既刊――

王子の帰還　薔薇の贖罪
封印の竜剣　闇黒の烙印
隻眼の皇帝　黒騎士とローマの青い薔薇
宿命の恋人　砂漠の流星

〈好評発売中〉 コバルト文庫

翠金丹を作れ。乱世のために。

桃源の薬

金雲の彼方　覇王の夢（前）

山本　瑤

イラスト／香坂ゆう



龍の血をひく方士・インシェンと彼に恋する凛花。薬を卸しに都に出かけたインシェンは、皇帝崩御の報せと人を襲う鬼の噂を聞く…。

〈桃源の薬〉シリーズ・好評既刊

桃源の薬
星の杖と暁の花

桃源の薬
春風に舞う後宮の花

〈好評発売中〉
コバルト文庫

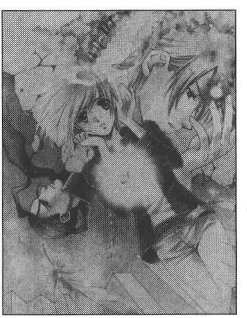
〝のぼるだけ…〟幻想世界で大冒険!

聖海のサンドリオン

天上の階と青い鳥

さくまゆうこ

イラスト／沙月ゆう



少年と偽り帆船『緑の宝玉』号で旅を続けるサン。東海の海神アナトレーを怒らせた料理番シルバートの額に呪いの烙印が浮かび…!?

〈聖海のサンドリオン〉シリーズ・好評既刊

聖海のサンドリオン

聖海のサンドリオン

海神の王子と幽霊船

ラブ★コン

LOVELY COMPLEX

—恋の歯車、回したろかー編—

ココロ直

原作 中原アヤ

大人気コミック
『ラブ★コン』を完全小説化(ノベライズ)!!
最新刊・第2弾
大好評発売中!!

デコボコ漫才コンビの胸きゅん♥ラブ☆!

犬猿の仲だった大谷のことが、好きになってしまったリサ。決死の想いで告白するが、激にぶの大谷にさくっとスルーされ!?

♥既刊・第1弾好評発売中!

ラブ★コン

高1のリサは身長170センチ。156センチの大谷とは毎日ケンカばかりだったが…!?



☆コバルト文

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086007993

ISBN4-08-600799-1

C0193 ¥419E

定価本体419円十税

1920193004199



コバルト文庫